三重大学人文学部「協同組合論」 2020年度講義レポート

三重県生活協同組合連合会

2021年2月5日

1,	「企業・行政と市民セクターとしての協同組合」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
2,	「協同組合の仕組みと原則」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5
3,	「協同組合と現代社会」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	8
4、	「大学と協同組合」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	11
5、	「消費者と協同組合」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	14
6,	「 医療・介護と協同組合 」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	17
7,	「食と農からみた協同組合」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	20
8,	「中小企業と協同組合」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	23
9,	「働く人の協同」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
10、	「世界の協同組合」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	29
11,	「協同組合と市民」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	32
12、	「生協運動の現在と未来」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	35
13、	「安心してくらせる地域づくりと生協〜組合員と地域住民とともに〜」・・・・・ 日笠 博幸/生活協同組合コープみえ 地域政策担当次長 大田 卓/みえ医療福祉生活協同組合 検診センター主任	38
14、	「協同組合間協同について」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	41
15、	「協同組合の未来」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	44

三重大学 人文学部法律経済学科

特殊講義「協同組合論」



<第1回(ZOOM)>

「企業・行政と市民セクターとしての協同組合」

青木 雅生/三重大学人文学部教授

三重大学で2020年度「協同組合論」全15講義が始まりました。今年度の講義は全てリモート(ZOOM、オンデマンド)での講義となります。協同組合とは何か、どのような役割があり実践があるのか、そして協同組合の今後について、学び考えます。

第1回(10月5日):受講49名(市民開放授業ー般受講者等を含む)

現代の資本主義社会において活動する組織として、企業や行政などのほか に市民セクターがある。そのひとつが協同組合である。

協同組合論は、市民などの自発性に基づいて組織される協同組合の本来の 役割や意義を歴史的な経緯も含め理解し、現代社会の諸問題について考え、 未来への課題を共有し、検討していくこと、協同組合と未来を担う学生との 関係、地域との関係などの可能性についても検討していく。

【第1回/講義の要旨】

- ・授業の概要や、講義形式、すすめ方、到達目標などについてガイダンスをおこなった。
- ・社会、とくに経済は、資本主義経済における企業の競争によって、社会や生活は豊かになってきた。その一方で社会生活の安全安心を脅かす種々の問題が引き起こされている。
- ・現代の資本主義社会において、企業と行政では担いきれず、市民の自発的・主体的取り組みによってまかなわれている。その主だったものに協同組合がある。
- ・協同組合が、なぜ生まれ存在するのか、経過や現在の活動と課題、未来においてどのよう な役割が期待されているのかを検討することが必要である。
- ・協同組合を一口に言えば「たすけあい」の組織である。資本主義経済の進展とともに貧富 の格差が著しくなる中、競争原理とは一線を画しつつ消費者や生産者たちが対抗する組織 として協同組合を設立する動きが広がってきた。
- ・協同組合は、共同で所有し民主的に管理する事業体を通じ、共通の経済的・社会的・文化 的なニーズと願いを満たすために自発的に手を結んだ人々の自治的な組織である。
- ・企業でも行政でもない存在として組織・団体の中で、協同組合を取り上げ、現代と未来に おける協同組合の存在意義と役割を考えたい。

第1回講義/受講生のレポート(抜粋)

- ・協同組合とは、事業を通じて人々の共通目的を達成する組織と定義されており、人々の生活の向上を目指すだけでなく自助と相互扶助によって長期的、多面的、利他的に事業を運営する組織であることが理解できました。行き過ぎた市場経済の競争によって、経済の混乱や過度な貧富の格差拡大、地球環境への悪影響、長時間過密労働による障害といったさまざまな問題が引き起こされており、その中で協同組合が担う役割はますます大きくなっているように感じました。また、人と人とのつながりを大切にし、支え合うことによって生き甲斐を感じられる社会を形成していくことにおいても協同組合は大きな役割を担っていると感じました。協同組合は私たちの生活に密接に関わっており、今まで協同組合について考える機会はあまりなかったため、この講義を通してその存在意義や役割、歴史的経緯などについて学び、理解を深めていきたいと思いました。
- ・法律経済の授業では私的組織である企業について学ぶことが多いが公的な部分の担い手となっている協同組合ならではの良さや必要性をしっかりと理解したい。共通の経済的、社会的、文化的なニーズと願いを満たすために自発的に手を結んだ自治的奈組織が今の自分にはあまりよくわかっていない。なぜ競走にならないのか、事業において協同するメリットはなにか、またデメリットはなにかを理解したい。昨年までとは違い今年は新型コロナウイルスの影響で日本や世界が大きく変わったので協同組合がその環境下でどのように活躍できるのかを期待して講義を受けたい。今回1番心に響いたのは、自らを助けよつとする自助が、他者を助ける他助になることだ。反対に他助が自助になる関係が成り立てば理想的であると思う。新型コロナウイルスによって人と人のやりとりや繋がりがなくなってきている中で、協同組合がリアルな人と人の繋がりが重要視しているため、新しい繋がり方も必要になってくるのではないかと思う。逆に言えば新たな可能性があると考える。
- ・人と人とのつながりが基盤となってできている協同組合は、新型コロナウイルスによる影響を大きく受け、大変な思いをしているのだと思いました。政府や企業だけでは補えない部分がたくさんあり、私たちの生活にとって、とても重要な部分を担っているということを知り、より身近なものにしていきたいと思いました。共同でもなく、協働でもなく、協同であるということが大切であり、これらの言葉の意味の違いを理解することは重要だと思いました。協同組合を存続させ、変わっていく社会に適応させていくために未来について考え、課題を克服していくことが大切だと思いました。
- ・協同組合は時代とともにさまざまな形態のものが、さまざまな役割を果たしていることより、協同組合というものは多様性に溢れていて、時代の特徴をよく反映しているのではないかと感じた。そして、現代は急速に発展してきていることから、従来の協同組合の枠組みとは違ったものになっていくかもしれないと考えました。
- ・企業や行政は多くのことの実行が可能ではあるが、対応できない部分も存在する。そのと きに自らの問題を解決するために個人で行動し、自らのために行っているように感じるが、 実際は同じような問題を抱えている人たちが関わり合って助け合っているという相互自 助や相互扶助という言葉が印象に残った。それは、利己的な自助ではなく、他助が自助に なるという関係が生まれ、自助の連帯こそが協同するために必要であると感じた。

- ・集団行動に重きを置いていた時代から次第に個人が尊重されるようになり、講義中にも行政にまちの運営を市民が一任するようになったように、まちの運営と市民の生活とを切り離して考えるようになったがために今の問題が起きていることから、「協同組合の活動が今地域社会に貢献している」というよりは「協同組合が担う地域での役割の重要性を再認識した」というのが正しいように思いました。この講義を通して今の協同組合がどのような活動をしているのかを具体的に見ていくだけでなく、以前の社会で人々はどのようにして自分たちの町を支えていたのかを研究したいと感じました。
- ・協同組合とは、資本主義社会と並行で、成長してきた組織であり、いつの時代でも、事業を通じて、人々の共通目的を達成することを目標とし、弱者の味方となってきたことが分かった。それぞれの時代、それぞれの組織で、どのような共通目的を掲げてきたのか、また、世界が変化していくに伴って、どのように人々の共通目的や目的を達成するためのアプローチ方法が変化してきたのか、とても気になった。この講義を通して、様々な協同組合の方々のお話を聞くことによって、漠然としか想像できない協同組合について、具体的なイメージを持てるようになりたいと考えている。
- ・企業や、行政がメインとなって社会を作ってきたという今の風潮の中、企業や行政だけでは補えない社会的役割を協同組合が今後将来の中で重大な役割を果たしていく。そもそも自治、相互扶助と相互の自立、尊重といった社会を念頭に置き、国家を形成していく際に国家に頼りすぎず市民自ら行動に出ることの大切さ。
- ・今後の日本において地方創生が叫ばれている中で、何か行政が政策を行う場合では地域の 協同組合の持つ市民側からの視点やノウハウが有効であると思うし、自然災害のような困 難な状況でも協同組合のネットワークが失われつつある地域のつながりを補完する重要 な役割を果たすのではないかと思う。
- ・人間は助け合い生きていく生き物だと言うことを再確認できました。大震災という非常事態により、自然発生的共同から自覚的協同に変わったことは地域の中における協同の大きな進歩であったと思います。現在、新型コロナウイルスという感染症が流行しています。この新たな壁を乗り越えることによって、地域の協同はさらなる進化を遂げるのではないかと思いました。今回の講義で共同・協同・協働の3つの「きょうどう」について改めて考える良い機会になりました。どれも意味は違うけれど私たちが生きていく上で欠かせないものです。身近なものでいうと大学の生協があります。生協があるおかげで食堂や購買が運営されており、私たちは支えられています。また、私たち組合員の意見はその運営に反映されるように努力しています。このようにお互いがお互いを支え合うことによって、より良い生活を作り上げているということを再確認しました。これから私たちがさらに高みを目指すためには、「きょうどう」によって自身が支えられていると言うことを自覚する人を増やしていくことが必要だと思いました。また、協同組合の良い部分だけを見るのではなく、課題や問題にも注目し、解決していくことが必要であると思います。協同組合と組合員の努力が良い生活への繋がりに思えました。

三重大学 人文学部法律経済学科

特殊講義「協同組合論」



<第2回(zoom)> 「協同組合の仕組みと原則」

石田 正昭/京都大学学術情報メディアセンター研究員

第2回(10月12日):受講48名(市民開放授業ー般受講者等を含む)

協同組合は、「非営利・協同組織」の一つである。地域に根ざした組織であり、営利目的ではなく社会的目的を実現するために人々が協同する組織であるとご講義されました。相互自助について語られ、ロッチデール原則と、国際協同組合同盟(ICA)、日本協同組合連携機構(JCA)などについて紹介されました。

【第2回/講義の要旨】

- ・非営利・協同組織とは、営利目的ではなく社会的目的を実現するために人びとが協同して 活動する組織のことを表している。生協や農協などの協同組合や、労働組合、NPO組織 などが含まれている。
- ・非営利・協同組織は、開放性・自律性・民主制・非営利性という特徴があり、地域に根ざした組織である。
- ・営利は得られた利益を投資家に還元することであり、非営利は事業の利用者に還元することを目的としている点で異なる。非営利・協同組織が事業活動で利益をあげることを否定してはいない。
- ・「政府の失敗」「市場の失敗」を補正するかのように、社会を構成する一人ひとりが力を合 わせていくのが、非営利・協同セクターということになる。
- ・ロバート・オウエンの連帯の思想は、資本主義に代わって協同原理にもとづく理想社会の 実現をめざした。
- ・協同組合は、相互扶助(助け合い)の組織と呼ばれるが、自助的な努力のうえに成立する 相互扶助を相互自助と呼んでいる。協同組合は「自助、共助の組織」である。
- ・ロッチデール公正先駆者組合は、当面の目標を実現するために 1844 年にロッチデール原則を制定する。1895 年には I C A が設立され 1937 年の第 15 回大会にて協同組合原則が採択された。この原則は、ロッチデールの原則から取り入れている。その後、1966 年と1995 年に改定してきた。

第2回講義/受講生のレポート(抜粋)

- ・今回の講義で協同組合には、個人と国家をつなぐための中間団体としてのもの、市場と政府の機能を補正するための補正組織としてのもの、弱者が強者に対抗するための対抗組織としてのものの3つの種類に分けることがわかり、これから特定の協同組合について考えるときにこの3種類を意識することが特定の協同組合の目的や目標を正確にとらえることができるようになると感じました。また、自助があって共助があり、共助があって他助があることより、他人まかせにせず、自分の問題は自分で解決するという心構えが大切だと感じました。
- ・今回の講義は、前回の講義を踏まえて、協同組合の定義をより具体的に説明してくださったので、協同組合の全体像を、回を重ねるごとに理解できているように感じます。特に石田先生が私たち学生にとって最も身近である生協の取り組みを何度も引き合いに出して話してくださったので、とても分かり易かったです。また、今回の講義で最も印象に残ったのが、ペストフの三角形の話で、国家を平等、市場を自由、コミュニティを友愛とし、その3つのバランスが取れたものが非営利・協同組織であるという説明を聞いたとき、前回の講義の話と繋がって理解が深まりました。
- ・協同組合の考え方でもある、自助、共助、他助、公助について、私たちの身近な存在である大学生協を例にとっても考えることができると分かった。これも公助や他助の『救済』 の考え方があって成り立っているのだと思った。
- ・今回の講義と前回の講義を通して、協同組合について大まかな内容についての理解が進んだ。以前であれば、協同組合と聞いても、言葉自体は理解できても、その内容や具体的な例を挙げるのが難しかった。特に、協同組織の4つの特徴である、開放性・自律性・民主制・非営利性はある種、国家が目指す最終目標であり、理想であるように思われた。理想的なものであるが故に実現性は乏しく、現実社会に即さない部分があるとも思われた。協同組合もまた、その構造上ある種の理想を含むように思われる。その理想と現実の折り合いの付け方、社会に自らの理想の実現を押し通していく方法、そういったことも含めこれからの講義の中で、協同組合についての理解を深めていきたい。
- ・今回の授業を聞いて、やはり協同組合などの組織は、組合員あってこその組織だなと思いました。また、授業全体を通して大学生協は、コロナウイルスの影響で今、とても困難な状況に陥っている生協もあるのかなと考えました。今後はサービスを提供するにしても効率化や安定化を実現化できる体制構築が課題となるかなと思いました。また、協同組合のアイデンティティ声明のところについて協同組合は、自発的に手を結んだ人々の自治的な組織であり、共通の経済的・社会的・文化的ニーズと願いを満たす組織であるので、利潤追及する株式会社とは違う性質を持っているなと感じました。
- ・協同組合法原則のベースとなったロッチデール原則は組合員の社会的および家庭的改善 を実現することを目的としています。これは自らより良い生活を創り出そうとしていると 言えます。金銭問題はお金を貸すことによって解決するのではなく、自分自身が改善しな ければ、意味がないということを理解しました。

- ・非営利・協同組織は、コミュニティ・個人を国家につなぐための中間団体としての立場や、 市場・私企業と政府の機能を補正するための補正組織としての立場、弱者(コミュニティ・ 個人)が強者(市場・私企業)に対抗するための対抗組織としての立場、この三つの顔をも ち存在していて、国家にとっても、経済活動にとっても、人にとっても必要な組織であり、 社会で生きていく上でなくてはならないものだと改めて感じた。また、ロバート・オウエ ンの登場が発端となり、労働組合大連合が誕生し、その思想に共感したオウエン主義者た ちが作ったロッチデール原則が協同組合原則につながったという流れがとてもよく理解 できた。時代が進んでいく上で、大切な部分は受け継がれ、その時代にとって重要視され ていたものが浮き彫りになって面白かった。
- ・協同組合は出資者であり、利用者でもある組合員が社会的目的を実現するため自らが組織の運営をしていて、さらにその運営は民主性が重視されているということだが、私は社会主義的特徴と民主主義の良いところを合わせたような組織だと感じた。また、協同組合の第7原則ので「地域社会への関与」とあるが、確かに「JA〇〇」のように同じ組織でも地域ごとに分かれていて、協同組合が地域社会と深く関わっていることはこれからの日本にとって大切であると感じた。
- ・協同組合は、非営利・協同組織の一つであり、「営利目的ではなく、社会的目的を実現する(人々の幸福を高める)ために人々が協同して活動する組織」であること。その特徴として、開放性、自律性、民主制、非営利性が挙げられる。特に非営利という言葉は、利益を得ないことを意味するのではなく、利益を得ることを認めているという点において、私たちが普段使う、非営利という言葉との違いがある。そして、営利と非営利の違いも大切である。営利は、事業活動で得られた利益を株主や出資者などの投資家に還元することを目的としているが、非営利は事業の利用者に利益を還元することを目的としているという違いがある。よって、非営利は自分のためではなく、「みんなのため」という考えが強く表現されている。
- ・第三セクターというものについて詳しくい考えたことがなかったため、国家や地方自治体と民間の市場だけでなく、非営利や協同組合がなければ私たちの暮らしに必要不可欠であるということを初めて感じました。個人と国家をつなぐものや市場・政府を補正するもの、弱者が強者に対抗するものといった、状況に応じた様々な役わりを持っていることを初めて知りました。また、自助、共助、公助についてもよく理解できました。近年では、都市部を中心に地域の人々とのつながりが希薄になっていますが、共助や公助、他助もこれから生きていく上では必要であると感じました。

三重大学 人文学部法律経済学科

特殊講義「協同組合論」



<第3回(zoom)> 「協同組合と現代社会」

向井 忍/NPO法人地域と協同の研究センター専務理事

第2回(10月12日):受講43名(市民開放授業ー般受講者等を含む)

人口減少社会を迎え、様々な問題と課題がある。自治体の人口が減少することで政治や経済、社会保障にまで影響があり、今あたりまえのようにある暮らしが成り立たなくなる。 生協は、その時代ごとにある社会的課題の改善に向け協同の力で取り組んできた。人口減 少社会で暮らし続けられる生活圏の維持が協同組合の役割である。何ができるのか、みな さんと共に考えていきたい。

【第2回/講義の要旨】

- ・ロッチデール公正先駆者組合は、当面の目標を実現するために 1844 年にロッチデール原則を制定する。1895 年には ICA が設立され 1937 年の第 15 回大会にて協同組合原則が採択された。この原則は、ロッチデールの原則から取り入れている。その後、1966 年と 1995年に改定してきた。「協同組合のアイデンティティ」(2015年 ICA100 周年大会)で、協同組合の定義と価値が確認された。これは、ロッチデール原則につながっている。
- ・協同組合を、事業の側面、地域・環境の側面、組織・運動の側面から捉えてほしい。
- ・生協は、地域と一緒に事業や取り組みをすすめている。コロナ禍にあり、子ども食堂でのフードパントリーと生活相談、外国人留学生や日本語学校生徒への緊急食料支援がすすめられている。
- ・生協は、組合員どうしの顔の見える関係づくりを大切にしてきた。新型コロナウイルス感染症のひろがりから人と人との接触を避けるなど活動ができない状況が続いたが、組合員どうしで考えあい、様々な新しい活動が始まっている。
- ・人口減少社会へのパラダイム変化により、地域コミュニティを前提とした生協の基盤は変化する。グローバリズム×人口減少社会=持続可能なコミュニティへの道である。
- ・協同組合が実現するニーズは何か、それぞれの協同組合で問題が解決できるのか、地域社会とどうかかわっていくのか、そして協同組合はどのような社会をめざすのかを考えていかなければならない。

第3回講義/受講生のレポート(抜粋)

- ・特に印象に残ったのは、「café わたぼうし」の顔の見えるお弁当依頼というテーマのスライドです。コロナの影響で、見えた人と人との繋がりあいの大切さや、こういった状況だからこそ分かる、その尊さや需要といったもののある種象徴だと感じました。このような姿が協同組合に求められる一つの役割だと、また一つ協同組合に対する知識への肉付けがなされたことを実感したテーマでした。また、"豊明市おたがいさまちゃっと"というテーマにもまた強い興味を引きつけられました。高齢化社会を迎えている現代日本、昨今高齢者による様々な事故や事件が問題視されている中で、このような事業は非常に重要な役割を担うに違いないと思いました。互いが協力し合うことで、一人一人の負担を軽減し、本当に助けが必要な時に助けを差し伸べることができるようになるこのシステムは、痒いところに手が届いたというか、今まで解決が困難であったり、コストパフォーマンスの都合上要求に応えれなかった数々の事例や需要を一気に解決・満たすような画期的なシステムだと思いました。
- ・今回の講義で、協同組合はただ単に物理的、金銭的に救済する組織ではないという印象が強まった。協同組合は効率性よりコミュニティを優先した組織だと説明されたが、いくつかの実例が紹介されて本当にその通りだと感じた。協同組合には三つの役割があって、経済、文化、社会の側面から支える存在だということが分かった。
- ・協同組合が地域の様々な機関と深く関わっており、特に地方では人口減少も進む中でそれぞれの地域の住民らと連携し、持続可能性を担う存在としての大きな役割を果たしている事、そして新型コロナウイルスが至るところで影響を及ぼしている現在、その重要性はさらに高まっていることが改めて感じた。
- ・地域資源は各地域に限られているので、それをどう活かすのかが重要になってくる中で、新しいモデルや、様々なアプローチの仕方で、どのように地域を支えていくのかを考える上で勉強になった。協同組合が様々な側面で地域や住民に対して貢献しているのがわかった。これから日本は、人口減少も進み、少子高齢化が進むことも予測されている。これから我々若者が、地域とどのように向き合っていくか非常に大切な問題であるので真剣に考えたい。
- ・日本の協同組合の組合員数が1億500万人を超えていることに驚いた。協同組合は、大学生協のイメージが強いが、信用金庫や労働金庫も含まれることを知った。また、協同組合の社会における活動として、買い物難を克服するための、サロンの開設、移動店舗の実施、また、地域の人の憩いの場として、人と人とが顔を見合わせて地域交流を盛んにするための、カフェの開設など、地域住民の事情を把握し、それに応じた取り組みをしていることが分かった。地域住民が生活しやすいような活動を行う協同組合は、私たちの生活にとって重要な役割を果たしていると思った。
- ・向井さんのお話を聞いていて、地域社会との繋がりという言葉が多く挙げられていて、 その地域で暮らしている人々のことをとても大切に考えていらっしゃって、私たちが暮らしやすいのは、向井さんのように生活を良くするために働いてくださっている方がいるからだと改めて実感した。このコロナ禍で、オンライン上や少人数規模で集会を開くなど、この大変な状況下にあっても、積極的に地域のニーズを調査していて、また、この新しい社会が生まれ始めた中で、どのようにそのニーズに対応していくのか、ということをしっかり考えられていて、就職活動をどのようにしていくかと考え始めたばかりの私にとって、お手本となる行動力・考え方であった。

- ・コロナ禍だからこそ地域のコミュニティとの関係が大事であり、地域分散型経済を目指してきた協同組合の取り組みをおざなりにせず、その責務を果たしたいという向井さんのお話がとても印象的でした。コロナの影響から自宅で過ごすことが多くなり、人との関わりがほとんどなくなってしまった中で、その状況に順応し新たな協同組合の活動の形を可能な限り早く確立しようと試みるのは、簡単なことではないと考えるからです。
- ・協同組合は経済・社会・環境の側面を持っており、この3つが循環しているとありました。私はこの中でも特に環境(人間関係)が重要であると思いました。社会で生きていくうえで、精神的に豊かであることはとても重要だと思います。生協への加入年齢のグラフで、30代前後と高齢の2か所で加入者が多く見られることが分かりました。30代は子育てや近所付き合いなどで問題を抱えている人が多かったり、また高齢者は一人暮らしであったり、他人の介助が必要であったりします。このような人々の精神的な支えになっているのが協同組合の大事な役割であると思いました。
- ・前回の講義において協同組合の基礎的な知識を知ったからこそ、今回の講義でより大きな視点で、より現実に近い視点で、協同組合とはどういった組織なのかを知ることで、より協同組合に関する知識が深まったと感じる。協同組合が実際に、どうゆう形で活躍しているのか、その一端を知れた。コロナの影響で外出が減ったために、その活動は落ち込んでいるかと思っていたが、むしろコロナだからこそ、その重要性が再確認されていることがわかった。
- ・新型コロナウイルスによる従来の取り組みができなくなっている今、人とのつながりが 重要である協同組合は感染予防対策を行いながらも新たな活動を模索し、チャレンジし て成功しているということを聞いて今できることを探し、厳しい状況にひるまず活動し 続けていることを素晴らしく思った。生協の行う活動が私たちの日々の生活に寄り添っ たものであるということ感じた。常に顧客のニーズにこたえようという姿勢、暮らしや すく安全・安心な生活を行えるよう取り組んでいることは、協同組合が事業を行う上で 重要であり、目的であるということを実感した。
- ・これからますます少子高齢化が進んでいきます。その中で今回の授業を聞いて、どのようにしていけば経済・社会がうまく循環していくのか、どのようにして国民が無理なく生活でき、地域間の格差をなくしていくかという論点が今後重要な観点だと考えます。また、これからの生活の変化を受け止めていかなければならない部分もあると思います。その中でもどのように豊かに、人々とのつながりを意識して生活をしていくべきかが重要であると感じました。その地域コミュニティやつながりを断ち切らないための組織が協同組合であると感じました。
- ・このコロナ禍において、人との関りや、社会においてのつながりの大切さに気付かされたため、協同組合の活動の中で、地域の人々とのかかわりを持ちながら行っている活動があることや、地域やそこの住民を支え、持続可能なコミュニティづくりをしているということに興味を持ちました。また、人口の大幅な減少による社会のあり方は、大きく変化すると思うので、これまでの活動だけでなく、高齢者を支えながらも、労働者世代や将来を担う世代への支援と継承をしっかりと行える体制に変化していかなければいけないと感じました。そのためにも、協同組合という立場をうまく活用して、持続可能で自立させられるようにしなければいけないと思いました。

三重大学 人文学部法律経済学科

特殊講義「協同組合論」



<第4回(オンデマンド)> 「大学と協同組合」

山本 昌也/三重大学生活協同組合専務理事

第4回(10月26日):受講45名(市民開放授業一般受講者等を含む)

大学生協の歴史や、大学生協のしくみと取り組み、組合員としての自覚や主体性、生協運営への積極的な参加について理解を深めていただきたい。

大学生協の背景には、必ず大学生の暮らしが向上するよう願う気持ちが存在する。営利を目的とせず、組合員の生活向上のために三重大学に大学生協を組織し、学生と教職員で運営している。

【第4回/講義の要旨】

- ・日本には800程の大学があり約260万人の大学生がいる。大学生協は214の大学にあり157万人の組合員がいる。三重大学生協は1970年に設立された。大学生協のない大学に通う大学生が生協に加入できるインターカレッジコープもある。
- ・1926年に、賀川豊彦らの援助を受けて、東京学生消費組合が発足するが、軍国主義による 統制などから弾圧を受けて 1940年に解散することになる。また、太平洋戦争では、学徒 出陣により多くの大学生が尊い命を失った。戦後、多くの大学に生協が生まれた。これま での経験と教訓から大学生協は「よりよき生活と平和のために」というスローガンを掲げ 継承している。
- ・大学生協の誕生・設立の背景には、必ず大学生の暮らしの向上を願う気持ちが存在する。 営利を目的とする業者が営業するのではなく、生活の向上を願う学生や教職員が大学生協 を運営している。出資金を出し合い、それを元手に事業をおこない、組合員が事業を利用 することで剰余が生まれ、その剰余は外に流れることなく魅力ある大学づくりの活動に還 元されている。
- ・生協の日常的な店舗・事業は生協職員が委託を受ける形で営まれている。お店の中にある 商品を買うというだけでは、お店とお客という結びつきでしかない。学生のための生協を つくっていくには組合員の参加が不可欠である。生協は、出資者であり利用者である組合 員が運営に参加をしてこそ成り立つ組織である。つまり、組合員は単なるサービスの受け 手ではなく自らの生協を自らの手で作り上げる主人公であることを意味する。

第4回講義/受講生のレポート(抜粋)

- ・大学生協は、誰かが運営しているわけでなく、皆で運営していくものである。このコロナ禍により経営が厳しくなっているが、大学生協が誕生した背景を学び、大学生協の存在価値を学びなおし、今後とも続いていけるよう自分事として大学生協を捉えていく必要があると感じました。
- ・生協は大学の利益目的のために設立されたのではなく、大学生や教職員が大学生の生活 向上を願い設立した。しかし、生協と大学は、設立初期対立していた。そこから魅力あ る大学作りに事業で貢献してきたことが今に繋がっている。こういった生協の歴史は生 協のルーツや目的を知る上で重要だと感じた。
- ・入学当初から存在しており、あまりその成り立ちや関わり方について意識したことがない大学生協の歴史や仕組みについて深く知ることが出来て良かったと感じた。おそらくこの講義を受講していなければ大学生協についてここまでの理解をすることなく卒業していたと思う。また、今まで希薄であった組合員であるという自覚を持って、総代会に出席する機会があれば積極的に出席してみたり、ニーズを伝えたりしていくことが重要であると感じた。
- ・大学生協が戦前からの歴史を持つことに驚いた。勝手に学生運動のころからのものと思っていたので、一度バラバラになり大学との対立関係にあったことを思うと、その成り立ちは簡単にできたものではないと強く感じた。また、組合員は運営者でもあるということで、今はコロナの影響で生協どころか大学にさえ訪れる機会は少ないので、通う頻度が戻ってきた時には運営者の目線でも生協の仕事をみてみようと思った。
- ・今回の講義では生協を通して協同組合について理解を深めた。大学生協は様々なことを考えて運営していることがよくわかった。特に三重大の生協が目指している、協同、協力、自立、参加と4つの使命をしっかり全うしているから成り立っていると感じた。大学生協が目指している3つのミッションも、とても生協を維持する上で重要であると感じた。特に三重大学と共に学びと成長をするという考えは納得した。生協では出資、利用、運営と全てをみんなですることによって上手く円滑しているのもよくわかった。
- ・コロナで授業がオンラインになった中で、大学生協も教科書販売方法の変更や店頭販売 の売り上げ低下といった問題が起きているとは、思いもしませんでした。大変なのは自 分や他の学生だけでなく、大学全体や生協も大変な状況であるということを実感しまし た。その大変な中で生協の工夫や取り組みなど生協の職員が私たち学生の為に頑張って くれていることに感謝しなければいけないと思いました。私は編入生なのでまだ学食や 売店に行ったことはありません。来年、学校に通えるようになったら利用することを楽 しみに後期も頑張ろうと思います。
- ・今回の講義は、自分に一番身近な大学生協に関することだったので、実体験などを踏まえることができ、いつも以上に理解が深まった。今は、コロナの影響で大学に行くことがなく、翠陵店や学食にも行けないが、今回の講義で自分は大学生協の組合員であると実感したので、これからはそんな私たちの大学生活がよりよくあるために生協はどうあるべきか、今まで学んだ協同組合の定義なども踏まえて考えていきたい。
- ・この講義を聞くまで、生協と私はお店とお客さんの関係だと思っていた。しかし、私たちは生協組合員であるため、実は運営していく立場であると知ってとても驚いた。確かに生協には入学したらみんな入らなければならないと思って加入したが、組合員になっているからには積極的に活動に参加しなければならないし、組合員としての意識を持たなければならないなと感じた。

- ・私たちも運営に参加していたということを改めて実感しました。入学するときに生協に ついては説明してもらっていたので生協に入る時のお金で運営していて循環させている 事を知っていましたし、希望すれば生協で働くことができるというのも知っていたので すが、そうではない人がひとこえカードで自分の声を届け、実際に生協を使うことで参 加できているということを初めて知りました。生協は普通の書店より文房具も書籍も安 いので私自身とても助かっているのですが、その生協を今後も運営し続けられるように 今後も運営に参加していきたいと思いました。
- ・生協は、正直購買と食堂くらいしか使っている実感がなかったが、他にも日々の大学生活で役に立ちそうな便利な仕組みやサービスがあることが分かった。ただ、コロナの影響もあって、学校に生協に行けていないので、今回の講義で知った生協のとりくみを意識して利用してみることが当分先のことになってしまうのが残念でならないと本当に思う。また、今回の講義において生協が新型コロナウイルス感染症の影響で大変大きな損失を受けていることを赤裸々に聞けて良かったと思う。実際、どうなっているのかは気になっていたところだし、一年次お世話になった生協が苦しい状況にあるということが実感できた。それと同時に、これがきっかけで自分自身が生協の組合員の一員であるという自覚と、何とか力になれないかと強く思った。
- ・生協の組合員であるにもかかわらず生協の取り組みや何を目的として活動しているかなどをわかっていなかったが、今回の講義で生協について多くのことを学ぶことができ、少しでも貢献や助け合いに参加していきたいと思った。改めて生協組合の一員であることを自覚し、組合員の1人としてより良くしていくために協力しようと思う。新型コロナが広まる中売り上げが上がらないのに利用者のためを思って取り組んでいることを知り、何かできることはないか考えようと思う。
- ・三重大学生協もコロナウイルスによって卒業・入学シーズンのイベントが中止になる、 オンラインによる教科書販売の準備・実施、食堂・翠陵店の利用者減少といった様々な 影響が出ており、経営状況を見ても非常に厳しいことが分かりました。実際にお店に行 くことは難しいが、別の何かの手段で支援できたらいいなと感じました。コロナウイル ス感染症を悲観的に考えるのではなく、この事態から大学生協の弱みなど明らかになっ たこともあると思うので、その点に力を入れ、改善していくことで、再びこのような事 態が起こってしまった場合に備えることが可能であると思いました。
- ・大学生協の取り組みの中で協同組合が大切にしている「助け合い」という姿勢を持った 考え方によって、私たちも知らぬ間に、ある一人の人の助けとなっている行動をするこ とが出来ていることに、すごくうれしさを感じられました。また、今コロナ禍で大学に 行けていない状況が続いているが、大学に行く機会が少しでもあれば生協の利用をして いき、生協の組合員=運営者として今後の生協の支えとなっていけたらいいと感じまし た。
- ・コロナウイルス感染症拡大によって大学生協も様々な変化を強いられ、人と人とのつながりの中で成長を育む大学生協の基本的価値が問われるようになった。しかし、これをマイナスにとらえるのではなく、今後またこのような事態が発生した場合の教訓にすると同時に、大学生協の弱みであるICTの活用、Webサービスの対応により一層力を入れる良い機会であると感じました。

三重大学 人文学部法律経済学科

特殊講義「協同組合論」

の次の新しい時代を築いていかなければいけない。



<第5回(オンデマンド)> 「消費者と協同組合」

田中 浩/生活協同組合コープみえ地域政策担当次長

第5回(11月2日):受講46名(市民開放授業一般受講者等を含む)

社会の情勢は、大きく変化してきた。組合員との関係づくりも同様に難しくなっている。コロナ禍は、その関係づくりをより難しくしている。しかし、 巣ごもり需要等から生協への加入が増え、供給は高い水準で推移している。 組合員が生協に加入する動機の多くに宅配事業の「利便性」がある。生協 を利用していく中で、くらしを守るための運動や活動をどのように伝え、知

らせていくかが重要である。また、これまでの到達点を踏まえ、生協として

【第5回/講義の要旨】

- ・組合員のニーズは、地域のニーズでもありコミュニティの中で行う事業や活動は地域社会 との連携も必要である。
- ・2003 年に県内の 4 生協が合併しコープみえが誕生した。合併当時との比較では、事業高が約 169 億円から 209 億円に、組合員数は約 10 万人から約 20 万人となった。県内の 4 世帯中 1 世帯が組合員であるが、全国平均から見るとまだまだ低い状況にある。
- ・コープみえの基本理念は、「つながりあう安心、笑顔が輝く くらし」である。また、2019年の総代会にて「SDGs行動宣言」を確認した。基本理念のもと組合員との絆を大切に、協同の力でSDGsの実現に貢献していくことにしている。
- ・新型コロナウイルス感染症の広がりから状況が大きく変化し、前年の供給実績を 15%程 上回る状態で推移している。また、学校給食の停止により牛乳の消費が減ったため、生産 者も守るという考えから価格を下げ、組合員の利用結集を呼びかけた。
- ・エシカルな考え方に基づく「エシカル消費」が注目されている。買い物時に、環境や社会など他者への配慮をプラスする消費のことである。エシカル消費は、SDGsの目標を実現するための重要な手段でもある。
- ・子育て支援や。高齢者支援、地域での見守り活動、被災地支援、環境保全活動を積極的に すすめている。「コープくらしの相談窓口」も特徴的な活動の一つである。

第5回講義/受講生のレポート(抜粋)

- ・今回も生協について学ぶことができた。前回同様生協は地域と共に作っていることがよくわかる内容だった。3 つの柱があり、出資や増資、利用、運営である。生協を利用する住民自らが出資、利用、運用するのが特徴的であり魅力的であると思う。三重県の生活協同組合が1973年に設立され、約50年以上も前から存在していることには驚いた。人と人が繋がりあって安心して出資利用運営できることが何より重要だと思った。4つの視点もこれだけ長く存在するには重要である。地域、環境、社会、人々とそれぞれが成り立たないと上手くは回らないのでバランスも重要だと思った。
- ・地域の人々が意見を出し合って生協をよりよくし、地域の人々の生活を支え合っている。 商品を納入するというだけでなく、その地域にあった商品を作ることができるというのが特徴的であると感じた。
- ・今までコープの配送車を見たり、大学の生協で商品を購入することくらいしか生協という組織の存在を感じたことがなかったのですが、今回スライドに登場した野菜ジュースに見覚えがあり家族に確認したところ私の祖父母が生協で購入して幼いころよく飲ませてくれたという話を教えてもらいました。今まで大学生としてしか生協と直接的な繋がりがないと思っていましたが、実はこんなに身近にあったんだと少し感動しました。また、お年寄りの見守りをおこなったり連絡をしたりする活動から生協は本当に地域に根差した組織だと理解できました。
- ・住んでいる場所によっては車がないと普段の買い物も不便なところもあり、特に高齢者などバスなどを利用してスーパーにいくしか方法がないという人にとっては、生協は本当に生活の助けになっていると感じる。高齢化も進む中、今後も地域の住民・組合員のつながりのための重要な存在になると考える。
- ・店舗で食料品などを販売している店舗の事業のイメージしかなかったが、商品の宅配だけでなく、商品開発や相談窓口、被災地の支援など幅広く活動をしているのだと知り驚いた。地域に密着した活動を行うことによって、組合員とのコミュニケーションが取りやすくなるだけでなく、組合員の生の声を聞くことで、商品の改善や需要が把握しやすくなると思った。しかし、コロナ禍によって、組合員との集まりの機会が少なくなったり、外出をはばかる組合員もいたりするなどの課題も発生しやすくなると考えられる。状況の変化にどのように対応していくのかが今後の問題となると思う。
- ・今までは地域生協になんの知識も関心も持っていいなかったが、今日の講義を通した少しは理解が深まったと感じる。特に、事業規模がここまで大きいとは思っていなかった。もっとこじんまりとした規模で、小規模ながらも地域に密着した組織だという認識であったが、実際は広い範囲ながらも地域との連携を強く持っている組織であることを初めて知った。2003年から2019年という短い期間で規模を2倍以上に増やしたことを考えると、その存在が地域にとっての必要不可欠で、そのニーズはますます高まっているだろうことがよく分かった。
- ・生協はただ単に商品を販売するだけの事業と認識されがちであるが、社会的な運動を行い、組合員や地域のニーズに応え、暮らしに貢献することを大切にしているため。そこへの認識、理解がより広まっていってほしいと感じました。
- ・今回の講義を通して、私は、コープみえは食品販売・運送を行っているイメージが強く て、それ以外の活動を知りませんでした。しかし、本当に幅広い活動をしていて、とて も驚いた。私は、三重県に貢献したいと考えているので、この講義で学んだこと以外に もコープみえの実績や今後の活動をもっと調べたいと思った。

- ・日本は経済発展とともに地域のつながりというものが薄れてきましたが、これから少子 高齢化に対応するために子育てやお年寄りの支援を行うには今こそ地域のつながりが必 要なので、協同組合は重要な存在になるだろうと思います。実際、子育て支援では子育 てしている人たちが会する企画があったり、高齢者支援では見守り活動や日々の宅配が コミュニケーションの機会になっていたりと居場所づくりがすすめられていて、これか ら認知が高まっていけば協同組合への期待も高くなると思います。
- ・大学生協しかり、コープみえのような協同組合は、自分たちのような加入者がサービス を受ける側であることが多く「客」のような立ち位置に見えることも少なくないが、加 入者ひとりひとりが組合員としてその理念を知り、自分たちにできることをしていく。
- ・コープみえの創立当時の志である「自分たちの手でより安全なものを安く供給しよう」という考えが大切だと思いました。どれだけ安全でも高かったら消費者のニーズに合わないし、どれだけ安くても安全性が低かったら同じ様にニーズに合いません。この志は、お客様に寄り添った素晴らしいものだと思います。また、商品開発の面では地元の産物を使った商品を開発していて地元に密着していて良いと思いました。地元「とり焼き肉」の商品が出ていることがとても嬉しく、また、食べてみたいと感じました。このまま生協によって、とり焼き肉が東海地方、また全国に広まれば、地域の活性化に繋がると思います。
- ・これから、必要なことは子育て世代と高齢者層以外の利用者をどのように増やしていく かが課題になってきていると思います。私はちょっと高級なお取り寄せなどを用いて利 用者が少ない世代を取り入れるのではないかと思いました。また、コープみえのその他 の組合員活動である被災地支援や高齢者支援、環境保全は私たちが今、直面し対策しな ければいけないものであるので、これらを生協で行うことは組合員の問題意識を高める ことにも繋がるのではないかと思いました。
- ・利用についての組合員アンケートで、年代ごとに求めているものが異なっていることを 見て、年代や時代に合わせて変化していく必要があると感じた。夕食宅配や見守りに関 する協定などをみて、ただ見守りを目的とするのではなく、配達など他のものと連携し て見守りを行っていくことで、見落としも少なくなり全体の負担も軽減できると思うの で良い取り組みであると感じた。生活困窮者支援に関する協定について、商品のキャン セルや注文ミスなどは必ず存在するがそのような商品を廃棄するのはもったいない。そ のような本来は廃棄になっていた商品を無償提供することは、食品を提供された人が救 われるだけではなく、食品ロスの削減などの問題の解決にもつながるいい取り組みであ ると感じた。
- ・南勢や東紀州は交通網が十分には整備されていない、過疎化高齢化による地元民の外出の困難化によって、組合員はコープみえに対して、商品やサービスを提供してもらう機会の増加(利便性)を求めていると考えらえる。よって、コープみえの従業員はより地域の組合員とのつながりが必要であると感じた。多少、送料などのコストがかかったとしても組合員はそのことを十分に理解しているし、それでも商品やサービスを提供してほしいのではないかと思った。そして、コープみえ(生協)に生活を支えてもらうことが過疎化高齢化の地域を存続させるために必要であると感じた。
- ・地域の人々が住みやすい環境や、消費者が安心できる地域づくりを人とのつながりを大切にして行っているということに、興味を持ちました。著しい時代の変化に対応するためにも、地域や組合員との連携が不可欠であるということを理解できました。

三重大学 人文学部法律経済学科

特殊講義「協同組合論」



<第6回(オンデマンド)>

「医療・介護と協同組合」

堀尾 茂貴/みえ医療福祉生活協同組合専務理事 大田 卓/みえ医療福祉生活協同組合主任

第6回(11月9日):受講46名(市民開放授業一般受講者等を含む)

医療福祉生協というのは、地域の人々が、それぞれの健康と生活にかかわる問題を持ち寄る消費生活協同組合法に基づく、人々の自治的組織である。

みえ医療福祉生協の事業と活動は、ともに創るという点が特徴である。医療・介護の従事者と組合員は、対等の立場でありパートナーであることを大切にしている。病気になったから病院に行くのではなく、一人ひとりが健康で、豊かに暮らしていける社会をつくることを大切にしている。市民参加のまちづくりでもある。

【第6回/講義の要旨】

- ・住民の手で「自分たちの診療所」をつくろうという消費者運動をきっかけに県内に医療生協ができ、2011 年に県内 5 つの医療生協が合併し、みえ医療福祉生協が誕生した。基本理念は、「健康をつくる」「平和をつくる」「いのち輝く社会をつくる」である。
- ・健康格差を縮めていくには、医療資源にアクセスできない人、しない人たちへのアプローチが重要である。病院の外にある原因に介入していくには、医療・介護従事者がコミュニティに入ること、組合員・地域住民・行政等との協同が不可欠である。
- ・組合員や地域住民が、健康で安心して暮らせる地域づくりを目指し、健康づくり、たまり場、たすけあいなどの活動をおこなっている。たまり場「ひだまり」は、組合員の声が詰まった宝庫である。有償ボランティア「いきいきくらしの会」は、暮らしの「困った」ことを組合員どうしで解決することにある。
- ・誰かが何とかしてくれる時代ではない。地域は自分たちで良くする住民自治が重要であり、 "わたし"のやりたいことを"ミニマム"に始めることが大事である。
- ・COVID-19 により事業は大きなダメージを受けている。外来患者の減少、検査件数の減少、健康診断の中止、マスクやガウン等の衛生用品不足、職員の身体的・精神的疲弊が続いている。人との接触を減らす中で、地域の「つながり」は脆弱化している。ウィズコロナ時代、組合員活動のあり方も見直すことが必要である。質の高い医療・介護とともに、組合員と地域住民の生活困難を解決する砦にならなければならない。「誰一人取り残さない」地域づくりが最も重要な課題である。

第6回講義/受講生のレポート(抜粋)

- ・地域に密着して活動し、うまく機能していたコミュニティもコロナウイルス等の事態に直面して新しいあり方を迫られていると感じた。コミュニティのあり方、これまでの顔を合わせて話すといったあり方は変わる必要もあると感じたが、一方で医療・介護の分野においては完全に顔を合わせないということも難しく、組合員どうしを守るための意識がより大切になると考える。
- ・病院は病気にかかったら行くものだと考えていたが、経済的理由などからメディカル・プアになってしまう人もいて、思ったより医療は行き届いていないのだろうかと感じた。また、単に健康を維持するだけではなく、生活の中で困っているところを助け合う仕組みもあって凄いと思った。
- ・「生協は経済的に勝ち抜くために事業をしているわけではない」という言葉が印象に残った。経営的にも状況が厳しいのは確かだが、自分たちで自分たちの生活をよくする、よりよい社会を目指すという目的を常に第一に事業を行う事の大切さを学んだ。
- ・自分たちの住んでいる地域は自分たちでよくする必要がある、誰かが何とかしてくれる 時代ではないという住民自治の考え方はどんな時代においても重要なものだと感じた。
- ・みえ医療福祉生協の成り立ちと基本理念が大切だと思いました。なぜなら、みえ医療福祉生協が伊勢湾台風などの困難から、市民や県民を救うための手助けとなるように創設されたという目的や元々の存在理由を知ることができたからです。
- ・単純に医療と聞くと病院でお医者さんに診てもらって…という印象だが、気軽にその場を設けられるような取り組みだけでなく、班会のように健康増進のための取り組みや、たまり場、たすけあい運動など地域住民が協力しあって健康に過ごしやすい社会を作っていっているところが素敵だと感じたし、生活に一番近い部分から健康へアプローチしていくことが大事だと感じた。
- ・『「陽だまり」での組合員の声』というところで、「その人が好きなことをしゃべって帰っていくのを受け入れることがその人の居場所になること」という話題がとても大切だと思いました。また、「そうして自分の居場所も作っていく」、「やがて自分の居場所にもなっていく」という話になるほどと感じました。
- ・みえ医療福祉生協の活動について、地域住民の健康のケアや助け合い運動、コミュニケーションの場を設けるなど、常に地域住民が過ごしやすいような取り組みを行っていると分かった。高齢化社会になる中で、病院への交通手段や日常生活で生じる不便なことなど、地域密着型でサポートすることは、地域住民にとって有益で便利な取り組みであると感じられた。また、コロナウイルスの流行下において、みえ医療福祉生協も大きなダメージを受けていると知った。今後、ウィズコロナの時代になり、地域住民とのコミュニケーションや相互協力することなど、以前に比べて困難になると考えられる。しかし、生協はそのような状況下でも、多くの課題がある中で、持続可能な社会の実現に向けて、誰しもが生活しやすいような事業を展開していくことが重要であると思った。
- ・地域の人々の話をじかに聞くことで、本当に必要としていることや困っていることなど が伝わり、地域一体となってよいまちづくりを行っているように思った。病院に来るこ とに対するハードルというものが存在し、自分の視点からではわからないこともたくさ んあるように思った。地域に出て実際に話を聞くことで見えてくる困難なことや直した ほうが良いことあり、協同して取り組んでいくことの重要性が分かり、積極的に取り入 れていくことが良いと思った。時代が進むにつれて地域とのつながりが薄れていく中、 コミュニケーションの場を作り、協力して生活していくことを目的として協同組合が行 う活動が地域の人々にとってどれほど支えになっているのか今回の講義で切に感じた。

- ・今までの講義で生協は組合員のニーズ・願いを基礎にした暮らしの助け合いの組織であると学び、生協だからできることが沢山あることが分かりました。誰かが何とかしてくれる時代ではないため、自分たちの暮らす地域は自分たちで良くする住民自治が大切であることに改めて気づくことが出来ました。
- ・今、コロナ禍で孤独な生活を強いられているが、今こそ協同組合としての役割を発揮し、視野の外に置かれた人たちとつながり続け、だれ一人取り残さない地域づくりを提案していて、また、コロナと共生していくための方法まで考えていて、なんでもまずは受け止めて対処法を考えていく姿勢が素晴らしいと感じた。今の時代、必要不可欠な存在である医療・福祉と私たち日本国民を上手くつないでくれているのが医療福祉生協で、コロナ対策だけでなく、たまり場やボランティア活動を積極的に組合員が行っていて高齢者の体のケアだけでなく心のケアまでしてくれることが分かった。さらに組合員が自らの行う活動の意味合いをとてもよく理解しており、それがまたより良い協同組合活動に繋がっていると感じた。
- ・病気などにかかった場合、基本的にはそのかかった本人が悪いというような自己責任論で考えられると思うが、今回の講義で環境に左右されるということを聞き、環境から改善していくことも必要であると感じ、その点で協同組合は優れていると感じた。病気の治療だけではなく、健康増進や検診などの取り組みを行っていることで環境面の改善ができていると思う。コロナで社会分断される中で協働性を基礎とした活動が自然発生的に様々な場所で行われていたということから、今回のような分断されるような状況に対しての協同組合の可能性を見ることができた。協同組合であっても社会を助けるとともに利益を出すような取り組みを行っていくことが重要であると感じた。
- ・「健康の社会的決定要因」と「健康格差」において、病気を発症した患者の状態だけを見 て、「1対1の原因がある」という原因探しをしているだけという話があったが、これは 問題を1つの角度からしか見ておらず、多面的・あらゆる角度から見られていないとい うことを意味していると感じた。私も問題に直面したとき、一点からしか見られていな いと感じることもあったため、多面的に見て問題解決に役立てていきたい。「いきいきく らしの会」の活動内容の中に、特技を学び合いながら、という項目があったが、やはり 自分のできることや得意なことを人に教えることは楽しいと感じた。組合員の一人が、 人の役に立てた、喜んでもらえたと述べていたように、私もアルバイトをしていてお客 さんに「ありがとう」という言葉をかけてもらえるだけですごく嬉しく思う。やはり私 も人の役に立つことをしたい。コロナ禍では、人との接触が減り、私もこのようにオン ラインという形で授業を受けている。オンライン化は時間を効率よく使えるという利点 が挙げられるが、リアルで話すのとは違うように感じた。今日は民法総則の対面授業が あり、久しぶりに大学に登校したが、授業中も授業後も、やはり対面での授業は、授業 を受けたということを強く感じられると思った。デジタル教育に力を向けられた世代は これから進むと推測されるオンライン化にも十分に対応できると思うが、デジタル領域 に不慣れな世代や人は、これから生活することが少し難しくなると私は思う。
- ・職員の方やボランティアの方、組合員の方が一丸となって医療を提供するだけでなく、 ともに地域住民の方の健康とその地域のまちづくりをされていると感じました。小さな 意見に目を向けて活動されているからこそ、スライドにも出ていたような笑顔が生まれ ているのだと感じました。少子高齢化が進む中で、このような活動をしていくことが 徐々に困難になりつつあると思いますが、協同組合の特性を生かして、お互いが手を取 り合って安心して暮らせる地域を作っていかなければいけないと感じました。

三重大学 人文学部法律経済学科

特殊講義「協同組合論」



<第7回(オンデマンド) **>**「食と農からみた協同組合」

村田 智広/三重県農業協同組合中央会次長

第7回(11月16日):受講46名(市民開放授業一般受講者等を含む)

JAは農業者である正組合員と、地区内に住所を有する個人やJAの事業を利用している准組合員で構成される。三重県内の正組合員は、約9万6千人、准組合員は約10万3千人である。また、県内では多彩な農業が営まれており、お茶や小麦は日本の主要産地の一つである。しかし、農業産出額や販売農家数は減少してきている。JAの経営環境も厳しい。だからこそ協同組合の強みを生かす時である。地域農業を振興し、地域社会に貢献していくよう自己改革をすすめる。これからのJAは、組合員がその形を決めるべきである。

【第7回/講義の要旨】

- ・JA三重中央会(三重県農業協同組合中央会)は、県下JAグループの指導(営農・生活・経営等)や、農政、広報、教育・研修などの事業をおこなっている。
- ・ J A の主な事業には、営農指導事業や販売事業、購買事業、信用事業、共済事業、厚生事業がある。また、介護や葬祭など組合員の声に基づき、さまざまな事業を展開している。
- ・各地域では、食育と農体験などを組み合わせた「食農教育」や、地域の居場所「ふらっとほーむ」、「健康寿命100歳プロジェクト」などの活動が活発に取り組まれている。
- ・三重県では、多彩な農業が営まれている。特に、お茶や小麦は日本の主要産地の一つである。一方で、生産農家の担い手や生産農業所得を向上させること等が課題となっている。
- ・平成26年に、政府主導の「農協改革」が行われた。また、平成28年に改正農業協同組合法が施行された。准組合員の事業利用に関する規制等が盛り込まれている。組合員のニーズから生まれた事業を、組合員が利用できなくなる等の問題がある。
- ・JAグループ三重は、「『多彩な農業』と『元気な地域』の未来を創る」をビジョンに、組合員との関係強化を基点にした"営農経済事業の伸長"と"すべての事業の効率化"、"組合員の協同活動への参加"と"JA事業利用の促進"を柱に自己改革をすすめる。
- ・コロナ禍により、事業と活動にも大きな影響がでている。外食の自粛に伴い牛肉や果物の利用が減少、給食の停止で野菜や牛乳の利用が大幅に低下、卒業式など式典の中止で花卉類の利用も低下した。生産者を守るため役職員が一丸で買い支えしてきた。
- ・これからの協同組合は、協同組合の認知→理解→共感→行動に向けたPRが大切である。これからのJAは、組合員がその形を決めるべきである。

第7回講義/受講生のレポート(抜粋)

- ・JAの認知度が低いという現状はあるが、JAの役割や活動について正確に理解できれば、 JAがもつ有用性や価値を実感できると感じた。そして、JAの活動内容から、JAが地 域農業などにもたらす影響はとても大きいと考えることができた。
- ・JAは、農家を営む人が安心して暮らすことのできる環境を提供するだけでなく、日本の 農業を充実させるために大きな役割を担っているのだと感じました。また、相互自助の精神に基づき、農家の営農を維持して生活水準を守り、高めることを目的に設立されたJA に就職することで、海外へ日本の食べ物の良さ、安心感などを伝えることのできる役割を 果たすことが出来るのではないかと思いました。講義の中でも取り上げられていたように、 日本において協同組合に対する認知度は低いと私も感じるので、協同組合の「認知→理解 →共感→行動」にむけたPRはこれからより重要になってくると思いました。私自身もこの協同組合論を受講するまでは協同組合について学ぶ機会があまりなかったため、大学の 講義など学べる機会があるのは大変良いと感じました。
- ・農家の協同組合といえば J A だというイメージですが、農家に対する支援だけでなく、食を通じた農業教育等も行っていて、次世代の農業関係者育成にも力を入れていて、今だけでなく将来の農業に対する積極的な姿勢も見られた。第一次産業の労働者は年々減少してきており、さらに高齢化も進んでいるが、農業の活性化に対する事業も具体的に考えられていた。また、コロナ禍で、J A はオンライン化や機械化を積極的に活用しており、新たな世界に変化することに対して前向きな姿勢が感じられた。さらに組合内だけでなく、県内の様々な機関と連携しながら活動していく必要があるとも述べており、これから先、三重大学とも何か連携して事業を行う場合は、携わってみたいなと思った。J A も前回の医療福祉生協のお話でもあったように、組合員や地域の人が集まれる場所作りを行っていて、そのような場所作りは協同組合の主な取り組みの一つなのかな、と感じた。
- ・身近にある存在ではあるが実際にどのような活動しているのか想像の範囲を出なかったので、今回の講義では農協はこんな活動までしているのかと新たな発見と驚きを得た。日本の農業といえば、日本の農家は海外(アメリカなんかを想定してます)と比べて小さい規模での農業がなされていて、兼業農家が多く、専業は高齢化に伴いどんどん数を減らしていることを知っています。ただ、自分の知識はそこまでで実際にそのような小規模の農家がどのような運営によって生計を立てているのかは知りませんでした。そんな小規模農家が多くを占める日本の農業では、お互いに支え合う共済組織である農協がとても大きな役割を担っており、農協なしではやっていけないほどとても重要な存在であることを初めて知りました。また、またそんな重要な存在である農協を政府が介入して強制的に指針を決定づけようとしている事実にも驚きました。そして、何よりその政府からの圧力の裏側には米国からの市場開放の要求があることに非常に驚きました。
- ・認定農業者数が横ばいになっていることや、農家一戸当たりの生産農業所得が低いことなど、様々な課題があると感じた。新規就農者数が増加傾向にあることは良いと感じたが、コメの一等米比率や園芸など生産額の伸び率が全国ワーストに近いという点は改善していく必要があると思う。農協改革のうちの準組合員の事業利用に関する規制については、農業者への還元分を増やすという点で見ると準組合員からの利益はあった方がいいと思うので、規制をするべきではないのではないかと感じた。JAグループは様々な地域振興に向けた取り組みを行っているが、それらの取り組みが認定農業者にあまり伝わっていないという状況はもったいないと感じた。政府主導の農協改革なども行われているが、「協同組合」だからこそ、これからのJAの形は組合員が決めるということは大切であると感じた。

- ・講義最後のまとめにあった「日本の協同組合の認知度は致命的に低い」ことは、人々が企業や行政ではカバー仕切れていないニーズを満たすために集まってできる協同組合の造りからすると、協同組合が活動を維持する上で重要な課題ではないかと感じた。今のコロナ禍で農業に限らず多くの協同組合が運営に苦しんでいると思うので、協同組合の活動の長所や普段の生活の支えとなれることをどれだけ多くの人に認知させるかが存続の鍵の一つになるのではないかと考えた。また、今回の講義で初めて三重県の農業が多くの課題を抱えていることを知った。担い手の育成は三重県だけの問題ではないが、農家経営規模の二極化や米の1等米比率・園芸等生産額の伸び率が全国ワーストに近いことなどかなり深刻で、JAの活動はこれからの農業を続けて行くためには必要不可欠なものだと感じた。
- ・農協と聞くと、生産者を助ける、または生産者同士で助け合うというイメージが強かったため、信用事業、共済事業、厚生事業など、想像以上に幅広い活動を行っていることが分かった。また、食農教育という活動は初めて知ったので、それについても、もう少し知りたいと感じた。協同組合は基本的には相互扶助の組織だと思っていたので、JAが小規模農家の既得権益を守っているように思われて、大規模な農業法人に敵視されているという話は意外だった。一口にニーズを事業化すると言っても、一筋縄ではいかないというような印象を受けた。また、農協改革のためにJAグループ三重は「自己改革」に取り組んだが、その後組合員のアンケート結果についても考えさせられる部分があった。アンケート結果を見た限りでは、参加率と事業への理解度が比例しているように感じたため、自分に関連のある部分に参加するだけでは組合としての効果を発揮しきれていない可能性があると感じた。最後に、JAは「地域農業」を振興し、「地域社会」の貢献しようと思っていて、その力の根源には地域の応援が必要であることが分かった。そのためには、例えば地元で生産された農産物を積極的に購入するなど、自分にもできる"応援"を考えることが重要だと感じた。
- ・JAは、三重県の農業人口の減少や品質のよくない農作物のような課題について、営農指導や農業生産力を強化する活動、農家に品質管理のアドバイスをするなど、積極的に取り組んでいることが分かった。地域の農業の振興や発展のために、JAが批判に晒されることもありながらも、事業を行い続けているのだと感じた。JAの取り組みを具体的に知ることができ、三重の農業が全国でもトップになるようにはどのような取り組みが今後、必要になってくるのか考えてみたいと思った。
- ・コロナ禍では、外出の機会が減り、人とリアルで会話する機会が減った。農業に関連すれば外食産業の売上の低下(利用客数の減少)である。お客が来ないということは、食品のロスにつながり、お店は農家からの供給を減らす。それによって、農家は利益を得るための取引相手の一つを失ってしまうため、利益も少なくなるし、農産物も余りが出てしまい、廃棄せざるを得ない。学校も休校期間があり、学校給食に使われる予定であった農産物の流通が止まってしまう。このような余った農産物を納得できる方法で処理(利用)してもらう方法の一つとして地域住民がボランティアのように購入することが挙げられるが、私はこの機会に、普段農業に関わらない人たちこそ、余った農産物を購入することを提案する。食は人間の生命活動を維持する上で必要不可欠であるから、農産物を購入するという行為はスーパーマーケットなどで必ず経験しているはずである。その行為を農家から直接購入することに換えてみれば、農家の苦労なども見ることができるし、より食べ物を粗末にしなくなる(できなくなる)と私は感じる。よって、普段私たちが食べるもののありがたみをこの機会に改めて実感することが重要であると私は思った。

三重大学 人文学部法律経済学科

特殊講義「協同組合論」



<第8回(オンデマンド) >
「中小企業と協同組合」

松井 寿人/三重県中小企業団体中央会

第8回(11月25日):受講46名(市民開放授業一般受講者等を含む)

中小企業と大企業は、資本金と従業員数によって区分される。また、業態により資本金と従業員数の定義は異なる。中小企業組合は、複数の中小企業が特定の目的のために、計画的・秩序的・継続的に、その力を自主的に結集し強くしている。コロナ禍により、多くの会員が売上・収益とも大幅に減っている。業務のあり方、考え方を変えればチャンスはある。

【第8回/講義の要旨】

- ・中小企業組合は、全国で約 3万6000の組合が存在する。三重県では、540の中小企業組合が活動している。
- ・中小企業組合の歴史は、中世以降($11\sim12$ 世紀)に発展した同業者組合ギルドが始まりであるとされている。1984年に設立されたロッチデール公正開拓者組合は、協同組合運動の先駆者的存在である。
- ・日本の中小企業組合の歴史は、奈良・平安時代に始まった「座」に起源し、鎌倉・室町時代には「株仲間」、江戸時代の「楽市楽座」「無尽」などがある。1900年に産業組合法ができ、現在の中小企業組合の基礎ができた。
- ・中小企業の抱える課題には、規模の過小性や生産性の低さ、資金調達力の弱さ、人材不足などがある。特に、人材不足は慢性的な課題となっている。課題の克服に向け、相互扶助の精神に基づき協同して経済事業を行い、経営の近代化・合理化、経済的地位の改善向上を図っている。
- ・中小企業組合の種類は、それぞれ目的ごとに事業協同組合、信用協同組合、企業組合、協業組合、商工組合、商店街振興組合がある。また、共同事業として、個々の組合員では所有できない機械や設備を組合が導入し組合員に供給する共同生産・加工事業や、組合員が必要とする資材や商品等を組合がまとめて購入する共同購買事業などをおこなっている。
- ・三重県中小企業団体中央会の会員数は507組合である。主な事業は、中小企業組合の設立支援や、中小企業組合の運営支援、中小企業振興のための陳情等をおこなっている。
- ・コロナ禍により、多くの会員が売上・収益とも大幅に減っている。事業を維持していくために持続化給付金や、家賃支援給付金、特別融資の施策が講じられているが、新しい生活様式に対応した経営をすすめていく必要がある。会員がマネジメント能力を高め、業務のあり方を抜本的に変えていく、新たな時代に対応した自助努力が必要である。

第8回講義/受講生のレポート(抜粋)

- ・中小企業組合の組織化により、個々の中小企業ではできないような経営の合理化や資源の 充実などができとても良いと思いました。規模の経済など小さな企業では大企業に太刀打 ちできないようなものでも、小さな企業が集まることで規模の経済にも対応できるように なり、大企業とも戦っていくこともできると思いました。身近なところでも中小企業の協 同組合があり、赤帽などは会社だと思っていましたが協同組合であるということを知り少 し驚きました。全国に36000も中小企業組合が存在し、三重県でも540も存在する ということは、少し意識をするだけでたくさんの中小企業組合の存在に気付くことができると思いました。協同の力で解決できる課題は小さな企業においては多く、人材育成や共 同受注など多岐にわたる分野で共同事業が行われており、中小協同組合の存在意義はとて も大きいと思いました。
- ・国の中小企業に対する見方は、大企業との格差を埋めるという存在から、中小企業ならではの強みを活かす存在に変わったと思うが、その中で実際の中小企業はどのように対応してきたのか気になった。地方経済には中小企業の存在は欠かせないと思うので、その分中小企業組合の役割も重要だと感じた。
- ・日本のほとんどの企業は中小企業であり経済の要ですが、やはり経済的地位が低いと感じるような認識があるなと感じていたので、講義の中での組合の役割や中小企業の課題の話を聞いて組合は必要不可欠なものだと強く感じた。規模が小さくともその地域には欠かせない企業もあり、地域経済はもちろん地域のインフラ的な部分を守っているということも中小企業組合の役割の一つと考えられるのではないかと感じた。
- ・大企業と違い、中小企業の組合は地域密地域に密着しているところが強みだと感じました。 地域の産業や伝統・文化、まちおこしなど、さまざまな分野で地域の経済を支えているの だと思いました。今後は伝統産業が薄れ、介護などの需要が上がっていく上で中小企業組 合の存在が重要になってくると思います。町おこしなども過疎化が進む地域では重要にな ってくるので、課題が多いなと思いました。「道の駅あやま」のような地域の産品を販売 し、地域を知ってもらうような活動はこれからも続けて欲しいと思いました。同時にこの ような道の駅をもっとたくさんの人に知ってもらえるようなことを考えてみたい。
- ・中小企業組合は、中小企業が存続するのにとても大切な存在であることが分かりました。 中小企業が、現在活躍で来ているのは中小企業組合の支えがあってこそだし、小さな力で あっても同じ志を持つ協同組合同士で協力することで大きな力となって地域に貢献して いるのはとてもすごいことだと感じたし、可能性は無限大であるように思った。コロナで 中小企業はかなりの打撃を受けていると感じているが、そんな状況でも、中小企業団体中 央会を中心に地域の中小企業みんなで協力して、乗り越えていけると思った。身近にたく さんの協同組合があるのではないかと感じて、もっと身近な協同組合について詳しく具体 的に知りたい。
- ・中小企業組合についてはじめて詳しく知ったのですが、規模などの多くの面で小さいために大企業などにかなわない点や課題がある中で、協同という力でその課題を乗り越えているということを知り、とても興味深かったです。これまで、中小企業はすばらしい技術を持っていながらも、工場の規模の小ささや人員の少なさから本来の力を発揮しきれておらず、それぞれの企業が苦しい状況にあるというイメージが大きかったのですが、今回の話を聞いて、規模が小さいからこそ中小企業協同組合が先頭に立って中小企業をまとめ、共同で事業を行うことによって課題を克服できるように支援活動を行っていることがわかりました。1つの企業では大企業に勝てないことがあっても、協力することによって企業間の連携体制も深まり、よりよい事業を行えると感じました。

- ・大企業と比べ様々な面での力が弱く、多くの課題を抱える中小企業においては、共同組合の存在はとても重要なものであり、必要不可欠な存在であることが分かりました。自分が中小企業への就職を考える際に最も懸念する事項の一つに福利厚生の薄さがあります。しかし今回の講義で、そういった面も中小企業組合のサポートのもと、より充実した制度の整備、より良い環境改善といったことが日々努められていることが良くわかりました。
- ・中小企業は規模が小さいことや生産性の低さ、資金調達力が弱い、人材不足という課題を 抱えているが、中小企業同士や地域の人々と協同して課題を克服していることは改めて協 同の力の強さを感じ、素晴らしいと感じた。中小企業組合が協同して行う事業は様々であ り課題を克服するだけでなくプラス効果ももたらしている。
- ・一人ひとり、また1団体ごとではできないことでも集まって協力することでできるようになる、というのは組合のいちばん大事なところだと感じた。自分たちが利益を享受しようとするだけでなく、組合の助けにもなろうとする姿勢が相互扶助を成り立たせるポイントであると思った。
- ・中小企業であれば、規模の過少性や生産性の低さ、人材不足などの課題を抱えていることが多い。そのような課題を相互扶助によって協同して解決していくということは、対象が人間ではなく企業同士であっても協同組合と同じものであると感じた。大規模な仕事を組合でまとめて受注したりすることなど、協同組合の方が中小企業単独で企業活動を行っていくよりも金銭的な制限や規模の制限を取り払うことが可能になるので有利であると感じた。人材育成などもそれぞれの企業が個別で行うよりも組合で研修会や講習会を実施した方が、費用の削減や技術力の向上にもつながると思う。
- ・中小企業は大企業に比べて、従業員や資金調達などの面で弱いため、協力しなければ組織 の存続が難しいと感じた。それを助けるために、中小企業組合があり、中小企業にとって 大きな拠りどころになっていると考えられる。事業を始めようと思っても、多くの人や組 織からの資金援助は必要不可欠であり、その返済計画の設定もとても難しいと思った。中 小協同組合の共同事業は範囲が広く、特に共同生産・加工事業、共同購買事業・共同受注 事業は、中小企業が慢性的に抱える資金面での問題の解決に役立っていると感じた。組合 が導入して生産・加工をすることで、安価に組合員に供給できること、規格が統一でき、 品質の向上が見込めること、個々では不可能な大規模の事業ができることなどさまざまな 効果がある。中小企業の数が減ってきており、後継者の不足も一因であるという話があっ たが、この話を受けて、私はより人材育成事業を進めていかなければならないと感じた。 職業選択の自由がある現代では、家業を継がないという選択もできる。それによって、他 の業種にも触れる機会があり、日本の大多数を占める中小企業も人材獲得の幅が広くなる。 これを利用し、より中小企業を知ってもらうための情報発信をしていかなければならない と感じる。資金面で苦しくても、将来への投資だと思って、外国人技能実習生よりも高価 な日本人の若者を雇って人材育成することが中小企業を存続させるために必要なことで あると感じる。
- ・中小企業組合は相互扶助の精神に基づいて、組合員に対して設備投資を行ったり、代わりに受注を行ったりするなど、組合に加入していることで、組合員の仕事の能率を向上させる取り組みを行っていることが分かった。コロナ禍で、中小企業組合の行う事業にも多大な影響が及んでおり、施設の維持や多岐にわたる多くの事業を行うことも大変であるだろうと感じた。アフターコロナの時代になっても、組合員同士で連携していく姿勢が大切になると思うが、改めて助け合いの精神を確認できるチャンスにもなるので、よい機会とも捉えることができる。

三重大学 人文学部法律経済学科

特殊講義「協同組合論」



<第9回(ZOOM)> 「働く人の協同」

豊内 和寿/日本労働者協同組合連合会センター事業団 東京南部事業本部 総務経理センター長

第9回(11月30日):受講46名(市民開放授業一般受講者等を含む)

協同労働の協同組合とは、働く人びと・市民が、みんなで出資し、民主的に経営し、責任を分かち合って、人と地域に役立つ仕事をおこす協同組合である。労働者協同組合は、誰もが自分らしく働き、暮らし続けることができる地域社会づくりをすすめている。国会で労働者協同組合の法制化がすすめられており、この法律ができると企業での雇用や自らが起業するといった働き方とは別に、新たな働き方の選択肢が広がることになる。

【第9回/講義の要旨】

- ・協同労働とは、働く人、利用者、市民が協同し、「ともに生き、ともに働く」社会をつく る労働である。
- ・協同組合運動の父と言われているロバート・オーウェンは、「産業上の自由をもつ手段として、労働組合のかわりに、組合的な企業を組織すること」が大事であると唱え、イギリスに多くの労働者協同組合が誕生するきっかけとなった。また、1844年にロッチデール公正先駆者組合が設立され消費者を視点にした協同組合が誕生し成功することになる。
- ・スペインのモンドラゴンでの発展と「レイドロー報告」で、労働者協同組合の必要性が再 評価された。労働者協同組合の再生は、労働が資本を雇うことになり第二次産業革命の始 まりを意味すると予想されている。
- ・ワーカーズコープの歴史は、中西五洲氏から始まった。国の失業対策事業の打ち切りから、 その事業関連で働いていた方々によって事業団をつくり事業を継続してきた。1986年 に、日本労働者協同組合連合会を設立し、事業モデルとしてセンター事業団を設立した。 人と地域に役立つ「よい仕事」をするという考えは、今も継承されている。
- ・ワーカーズコープでは、「地域福祉事業所」の開設や、指定管理者制度に基づき多くの施設で管理運営の受任、F(食)・E(エネルギー)・C(ケア)を自給・循環する地域コミュニティづくりをすすめている。
- ・日本には「労働者協同組合」を規定する法律なく、国会で法制化に向けて審議されている。 「労働者協同組合」の法律が出来ることで、3人以上集まれば誰でも労働者協同組合を設立することができるようになる。企業での雇用や、自ら起業するとは別の働き方の選択肢が、ここから広がることになるのである。

第9回講義/受講生のレポート(抜粋)

- ・労働者協同組合の法律を作ることで、法人格がもてるのはもちろん、協同組合の地名度を あげられるということは確かに大きな一歩だと感じたし、先進国の中でそのような法律が ないのは日本だけだというのにも驚いた。近く成立しそうであるとのことで、法制化を働 きかけ続けてきた結果なのだろうなと感じた。また、赤字が出ることに対して非常にシビ アな感覚を持っていらっしゃるようで、協同組合においてもそう言った意識は大切なのだ なと感じた。
- ・高齢者や障がい者福祉、子育て支援、など地域に密着した取り組みなどをされていることが強く印象に残りました。特に、誰もが自分らしく働くことができる社会を目指して、働くことが困難な人々や生活保護受給者、障がいがある子どもたちに、困難があっても自分らしく働くことができるようにサポートする取り組みは本当に地域を大切に思っているのだと感じました。
- ・これまでの生協や農協などと違った働く人の協同組合であり、聞いたことがなかったので 最初は身近に感じなかったが、理念や活動内容などを聞いて、ワーカーズコープが目指す のは自分が理想とする社会のあり方だなと感じた。数年後に社会に出る身として自分もそ ういった社会を実現するためにどうするべきか考えていきたい。
- ・協同組合の事業には本当に多くの人が助けられているんだなと資料の写真をみて感じました。困っている人たちの受け皿になることでその人たちの居場所が出来ているのではないかと思いました。また、このコロナによってそういう人たちが集まる機会が減ってしまっているのではないかと思いました。そのためオンラインでそういう人たちの居場所をつくるために何かしていかないといけない必要性があるのではないかと感じました。
- ・組合員がその現状をどのように受け止め、改善していけばよいのかを考える必要があると思った。恩恵を受けるばかりで、組合の現状について考えようとしなければ、それは協力しているとは言い難いのではないかと思った。三重大の生協もコロナ禍で赤字になっていると聞いたので、ウイズコロナの時代になり、私たち組合員がその状況をどのように打破していくのかについて、真剣に考える必要があると思った。
- ・働く人たちが全員で出資をして、民主的に経営をして、地域や人々の役立つような仕事をする労働者協同組合がどのような歴史で成立して、どのような活動し、現在ではどのような活動で成り立っているのかをよく知ることができました。なかでもコロナ禍において、近年にまれに見るような黒字の経営だったとしても、それはよくない黒字であって、むしろ悪い傾向であると言うようなお話には衝撃を受けました。今日の講義で、労働者協同組合について知ることができましたが、それはまだ変化にある途中にある姿にすぎず、これから参議院で法案が可決されれば、更なる飛躍が期待されることでしょう。ですので、自分もこれからの動向に注目して、さらに労働者協同組合とはどのような組織となっていくのか、また経済に与える影響はどのようになっていくかを考えていきたいと思いました。
- ・レイドロー報告において、労働者協同組合の再生は、第二次産業革命の始まりを意味し、 「労働が資本を雇う」とあったが、普段私たちの考える労働とは反対の考え方であったため驚いた。資本があるから(出資者がいるから)工場を建設でき、労働ができるというのが株式会社の成り立ちには必要である。これは、まさに市場競争による利益追求の典型的な流れであり、今日の資本主義社会の象徴であると私は考える。しかし、労働者協同組合は自分たちで出資し仕事を創造するため、出資者や株主が支配権を持つには至らない。所有と経営の分離がされているわけではないが、所有と経営が全員に分配されているため、独裁が起こらず、問題があまり無いと考えられる。よって、自分たちによる自分たちの目的に適した事業活動ができ、非常に効率の良い組織であると感じた。

- ・コロナの影響で活動が行えない分資金が余っている状態である現在、本来の資金余剰ではないことをどう地域の人々と活動してコロナを乗り切るか、どういった活動ができるかを模索しているといった話で今の状況を乗り切るためにやはり人々とのつながりをとても重要に感じたし、本来の資金余剰でないということを自覚しそれをどう改善していくか考えていることに協同労働のすばらしさを感じた。
- ・ワーカーズコープの事業は地域復興が中心であり、地域密着の福祉・介護から、子育て支援、公共施設の管理といった幅広い分野に取り組んでいることが分かりました。講義の中でも取り上げられていたように、定年退職をした方々の中高年雇用も実施されており、定年後に地域に貢献できる仕事が存在することは大変良いことであると思いました。こうした働き方が増えることによって、地域社会が活性化される、社会構造が変革されるといったことにも繋がっていくのではないかと感じました。れから法制化に向けての取り組みにおいてどのような進展があるのか、関心を持って生活していきたいと思います。
- ・地域創生の大切さを知りました。私は、今まで大企業にまかせて安定的な管理をさせたほうがよいのではないかと思っていました。しかし、それでは地域活性化や地域とのふれあいにつながらないと考えさせられました。また、施設の管理以外も国に頼らずとも市、町という小さなまとまりでつながり、活性化をさせることが大切だと思いました。授業の最後におっしゃっていた児童館にきた障害を持つ18歳の女性の話を聞いて本当に協同組合は、今回の女性のみならず、一人ひとりの組合員、人に親身になって事業、行動をしていると感じました。
- ・丁寧な仕事やまじめに取り組む姿勢が大切であると感じました。地域に必要な仕事は地域 住民が担うという言葉のもとで指定管理者制度の導入に伴い多くの公共施設の運営を担 うなど地域との結びつきが気の付かないところで多くあると感じました。働く人がお金を だし、やりたい仕事をしていくということは夢を実現するということになり、また人のた めにもなるということでWinWinの関係だと思いました。また、利益にならないよう な活動でも、それをきっかけに協同組合を知ってもらう機会になり、今後の活動の利益に つながるのではないかと思いました。
- ・ワーカーズコープの歴史の中で、だれも雇ってくれないなら、自分たちの働く場は自分たちで作るという部分があるが、この考え方は、現在のコロナウイルスのような、職を失う人が多く出るようなときこそ必要な考えであると思う。障害のある人や高齢者、生活困窮者など、一般的な仕事をすることが難しい人であったとしても、労働者協同組合のような働く場を働く人が作る協同組合であれば、それぞれが自分らしく働けるような社会を作るということができると感じた。
- ・ワーカーズコープが、地域にとても必要とされている存在であるということがとても伝わりました。そして、ワーカーズコープは企業に雇われることでも、自分で事業を行うことでもないという位置づけについても理解できました。また、日本に労働協同組合を規定する法律がなかったことに非常に驚きました。日本ではかなり働き方についての意識も高まりつつあると感じていたため、法制化の面で他の先進国よりも遅れているということに驚きました。また、法制化されることで、活動が楽になるわけではないとはおっしゃっていましたが、これまで以上に支援の幅が広がったり、働きやすいと感じられる人が増えたりするのではないかと感じました。皆が自分らしく働き、暮らしていくということを実現することはかなり大変なことであり、それを持続させることはさらに多くの人の力が必要であると感じました。そのような地域とともに地域を支える事業を行っている方々のお話を聞くことができ、大変興味深かったです。

三重大学 人文学部法律経済学科

特殊講義「協同組合論」



<第10回(zoom)> 「世界の協同組合」

天野 晴元/日本生活協同組合連合会 国際部部長

第10回(12月7日):受講46名(市民開放授業ー般受講者等を含む)

世界には300万程の協同組合がある。ICA(国際協同組合同盟)には、109か国310の組織が加盟している。また、組合員数は世界全体で12億人と言われており6人に1人が組合員である。また2.8億人が協同組合で働いており雇用人口の約10%にあたる。今回の講義では、世界の様々な生活協同組合や、各種の協同組合を紹介する。

【第10回/講義の要旨】

- ・国連は、協同組合の発展に支援的な環境づくりをめざしたガイドラインを策定しており、 各国政府に対し協同組合への環境整備等を要請している。2012年は国際協同組合年に 設定され、2016年には協同組合の思想と実践がユネスコの無形文化遺産に登録された。
- ・スイスには、コープスイスとミグロの生協があり、国内のマーケットシェアは約8割を占めている。イギリスにも様々な生協があり食品等の小売、旅行、葬祭、保育園、電力小売等の事業を展開している。倫理性を重視した事業運営、動物福祉やフェアトレード、生活弱者や学校支援等に取り組んでいるのが特徴的である。イタリアには、コープイタリアに加盟する生協が国内マーケットシェアの約2割を占めている。組合員との関係を大事に消費者運動や行政への提言、生活弱者への支援等を積極的にすすめている。また、スペインには、モンドラゴン協同組合があり働く人と消費者が共になってつくる生協もある。
- ・シンガポールのフェアプライスは、消費者の利益と生活の安定を大切に事業や活動を展開しており、国内のマーケットシェア50%以上を占めている。韓国のアイコープは、国産の農産物を重視し、食の安全や環境保護、倫理的消費をすすめている。また、アメリカは協同組合が世界で一番多い国である。小さな生協が多いが、オーガニックや地産地消を大切にした商品を供給し、組合員は生協での一定時間の労働を義務化している生協もある。
- ・労働者協同組合は、同じ目的を持つ人々が出資(設立)し、働き、経営する能力を出し合い、かつリスクと責任の両方を共有している。世界には、このような協同組合がたくさんある。日本でも法制化が整い、これからの広がりに期待する。社会的協同組合では、コミュニティの全般的利益を追求している。特に、社会的サービスの提供や、雇用の創出に向けた社会的弱者の包摂がすすめられている。コミュニティ協同組合は、主に過疎地や都市部の経済的に不振な地域で協同事業をおこなっている。また、小口金融協同組合も世界にたくさんある。インドでは女性が自立できるよう女性だけの協同組合が組織され、小口金融協同組合の資金融資等で事業をおこなったりしている。

第 10 回講義/受講生のレポート(抜粋)

- ・世界の生協のその国内におけるシェアが想像以上に大きかったことに驚きました。講義の中で日本の小売業界では高くとも1割を超える程度のシェアというお話でしたので、正確なデータが気になって調べて見たところ、2018-2019年の小売業の日本国内シェアは一位のイオンが13.9%、二位のセブン&アイ・ホールディングスは11.1%、三位のファーストリテイリングが3.5%といったものでした。これらの数字を見ると、イタリアやシンガポールといった国の生協の影響力がいかに大きいかがよく分かります。その上、イタリアの生協は社会改革や消費者運動に熱心であることも知りました。そして、国が担っているような公共全体への利益、幸福となるような事業をこのように大きな影響を持っている組織が率先してやる、これがこれからの社会に必要とされる組織のあり方、これからの社会においてなくてはならない存在であることを、同時に強く確信しました。
- ・世界の協同組合には規模が大きいものから小さいものまで多く存在し、それぞれが組合員や地域、コミュニティのニーズに合わせて活動をしていることが分かった。日本の協同組合で学んだように世界でも同じように、相互扶助があってこそ、組合での活動が成り立っていることが分かった。日本とも、また世界の各国ごとで違いがあって日本でいうJAのような金融事業を行っている協同組合が世界にも存在しているなど共通点も発見できた。
- ・世界にも多くの生活協同組合が存在し、日本とは違った立ち位置や必要とされる形態であって、様々な姿で生協が存在していることをとても興味深く感じた。特に、イギリスでは葬祭の活動をしているということに驚いた。日本と同様の労働者協同組合だったり、社会的協同組合といった各国は行政からの事業受託や自ら仕事を創造することで失業した人や生活に困っている人々に対しての雇用創出が行われている。コミュニティ協同組合は経済的に不振な地域での必要とされている事業を協同組合方式によって行っており、地域の人々の生活をよいものにし支援している。日本にはない協同組合であるが、こういった体系の協同組合もどんどん出てきたらよりよい生活ができる地域が増えるのではないかと感じた。日本も外国の小口金融協同組合のように自由度の高いようになればより良い事業が行えるようになるならば、その点見習ったほうが良いと思った。
- ・イギリスの生協についての話があったが、倫理性を重視した事業運営を行い、動物福祉や フェアトレード、社会問題に対する取り組みをしていることがとても大切なことであると 感じた。業種例として食品等の小売、保育園の運営などが挙げられるが、特に、保育園と いう子どもが集まる場所において倫理性は何よりも大切であると考えた。また、公的な学 校に対しての私的な組織が支援しているという構図も日本にもっと導入されるべきもの であると思う。子どもや社会的弱者を守り、社会を豊かに、誰一人取り残さない社会を実 現することにおいてイギリスは先進的であると考えられる。イタリアの生協も高い商品力 を強みとした活動によって国内小売シェアの20%ほどを持っていることから、国内で大 きな影響力を持っていることが分かった。スペインでは、働く人と消費者のどちらも組合 員であるということが強く出ていると思う。シンガポールでは、生活費の安定が社会的な ミッションとされており、CSRの4つの柱を強く意識していることが分かった。自分た ちのニーズを満たすために、生協を作るということは、協同組合を増やすという点におい ては必要なことであると感じた。労働者協同組合は、同じ目的を持つ人々が出資し、働き、 自分たちで経営しているとあったが、リスクと責任の両方を共有しているため、独裁が起 こりにくく、公正な活動ができているため資金面では弱いが、その点を除けば理想的な協 同組合であると思う。しかし、これは収益性を重視しない協同組合であるからこそできる ことであり、収益性を重視する企業は根本的な改革をしない限り、協同組合のような理想 的な運営はできないと感じた。

- ・それぞれの国で生協にも独自性があり、また国としての経済規模と生協の事業規模は必ず しも比例しないということがわかった。ただ、市民の生活・社会的弱者の支援や地域への 貢献など、やはり根本の部分は共通しているように思えた。
- ・協同組合がこんなに多く世界に存在していることに驚きました。また国よっても特徴があることが分かりました。例えば、イギリスでは生活弱者や消費活動が困難な人に手厚く、イタリアでは社会改革や消費者運動を特に支援しています。またスペインのバスク地方では出資型の生協でも働く人と消費者がともに組合員であるという珍しい構成でした。また、小口金融協同組合は日本では馴染みがなく、初めて聞きました。金融を扱うことで、組合員の生活で細やかな支援ができる一方で、用途が特定されず無限であるため、支援を受ける側も注意しなければならないと思いました。
- ・海外では生協に対する知名度が日本に比べてより高く、また事業に対して積極的だということである。このような違いは、日本では協同組合の種類によって、省が分かれていることが原因の一つであるとおっしゃっていたが、国民やその国自体がどれほど協同組合に対して関心を持ち、協同組合が行う事業に対して肯定的なのかが大きいと思った。また、今回の講義の中で印象に残った事業は二つある。一つ目は、イタリアで行われている罪を犯した人の雇用を創出したり、刑務所と社会をつなぐ架け橋になったりするという事業である。犯罪者の社会復帰・更生を手助けするような協同組合は初めて聞いたので、なぜそのような組合を作ろうと思ったのか、そのきっかけについて聞いたみたいと思った。二つ目は、金融を行うという事業である。協同組合は、どちらかといえば融資してもらって事業を行うというイメージがあり、協同組合自体が融資を行ったりするということに驚いた。
- ・協同組合の法律に関して、海外が一本化しているのに対して、日本は協同組合の法律が多数乱立していることで協同組合にさまざまな制約がかかり、協同組合が動きづらい原因になっていると感じました。また、今回の講義で海外の協同組合の取り組みの例などから、小さな協同組合でも特定の地域や特定の人々に対する影響力がかなり大きいと感じた。
- ・日本だけでなく、世界での協同組合の取り組みを見ていくと、国によって重点的においている部分が異なるが、どの国においても現在直面している社会問題やこれからの社会に対して生協の取り組みが重要な立ち位置となってくると感じられた。このコロナ禍で形は異なるが、生協が人々の支援となっていることが大切であると感じた。
- ・イタリアに多い社会的協同組合は、障害者雇用の問題を扱うなど、NPO法人に似た性格があるように感じました。労働者協同組合法の成立についてですが、これは新型コロナウイルスの影響により打撃を受けた雇用状況の受け皿になるとニュースで聞きました。家事をしながら週3日でパートをしていた女性が、次に働く場所が協同組合というのは素敵だなと思いました。
- ・世界各地にも様々な生協の様式や特色があり、それぞれの国にあった生協が展開されていると感じました。特に、組合員が生協の店舗で実際に労働を行わないと組合員として店舗を利用することができないというのは、運営しているという実感を沸かせるとともに、経営に関与することでより生協のことに対して真剣に考えることができ良いと思いました。
- ・今回の講義では世界の協同組合について知れてとても興味深かったです。何事においても 広い視野を持ち、様々な角度から考えていくことによって更なる発展に繋がるということ を再認識出来ました。色々な国に協同組合や生協がある事はなんとなく親近感を感じまし た。また、アメリカの協同組合員数が多いことに驚きました。資本主義であるにも関わら ず、協同組合が発展しているということは、人々は協力して生活していくことを望んでい るのかなと感じました。

三重大学 人文学部法律経済学科

特殊講義「協同組合論」



<第11回(オンデマンド) > 「協同組合と市民」

松井 真理子/四日市大学総合政策学部教授

第11回(12月14日):受講46名(市民開放授業一般受講者等を含む)

協同組合が社会の中で、どのような位置づけになるのか市民という観点から考える。協同組合の理念に「公益性」があり、協同組合原則の改訂により、協同組合とNPOとの連携によって力強い市民社会が生まれ、社会を動かす大きなポテンシャルになると期待している。また、労働者協同組合法の成立により地域の様々な課題が協同組合によりすすめられていくと期待する。

【第11回/講義の要旨】

- ・NPOとは、NPO法(特定非営利活動促進法)に基づき、公益目的で市民が自発的に行 う民間非営利組織である。また、協同組合は、共同で所有し民主的に管理する事業体を通 じ、共通の経済的・社会的・文化的ニーズと願いを満たすために自発的に手を結んだ人々 の自治的な市民性を強く持った組織である。
- ・対価を得ないボランティア的な慈善型NPOと、組織を継続させるために一定の対価を得る事業型NPOに分けられる。事業志向の背景には、社会的な課題解決が仕事や収益になること、慈善型では継続が困難であること、自由度が高く革新性のある点が挙げられる。
- ・市民活動の特徴には、社会性や、自発性、非営利性、非政府性、先進性がある。その担い 手は、社会的課題に対する直接の当事者や共感する間接的な当事者で構成されている。ま た、社会的企業とは、市民が主体となって社会課題を「ビジネスの手法」により解決し、 その利益を社会に還元する事業の総称である。また、連帯経済とは、「連帯関係」が組み 入れられた経済活動であり、グローバル資本主義経済に対抗する「代替的な経済」である。
- ・市民活動の魅力は、「社会を変える」ところにある。政府や企業、家族ではできない公的 サービスや、地域・目的コミュニティを通して仲間やネットワークをつくること、課題当 事者のエンパワーメント、自分たちの課題に主体的に取り組む文化づくり、社会的課題の 解決に向け社会に働きかけることできるのである。
- ・協同組合は市民参画による経済的事業体であり、事業を通じて社会課題の解決を目指している。市民と協同組合とNPOとの連携によって力強い市民社会が生まれ、社会を動かす大きなポテンシャルとなる。また、労働者協同組合法の成立により組合員が出資し事業に従事する協同組合が、地域の様々な課題解決に向け生まれてくると期待する。
- ・「協同」による「つながり」の創造が大切であり、課題当事者や関係者による協同と、サービス利用者との協同、目的への賛同者との協同が、地域に協同の輪を広げることになる。

第 11 回講義/受講生のレポート(抜粋)

- ・NPOや協同組合においても「市民」という言葉がキーワードのように感じさせられ、共通の経済的・社会的・文化的ニーズと願いを満たすために自発的に結んだ人々の自治的な組織と定義されているように企業がやろうとは思わない事業であったり、国家において気づかないような部分を市民が自ら活動することで協同して課題解決をしている。また最近では事業志向になっており、継続した課題解決を図ることができるようになっている。活動を行う上で収益が必要となるのは当たり前のことであるにもかかわらず、活動自体が地域のため必要とする人々のためであり、その活動自体も社会で活動しにくい障がい者であったり、自立をサポートすることにつながっていてとても素晴らしく思った。食品ロスの削減が大きな課題となっている日本で市民かつ消費者の協同組合員が先陣をきって行政や企業学校生産者に働きかけて食品ロス削減といった目指すべき社会像に向かっていることを知って協同組合の存在の大きさを改めて知った。そして、自分自身行動したいと思った。
- ・協同組合とNPOは異なる存在であると思っていたが、協同組合の理念に公益性が追加されたため、この2つが協力して行う事業がこれから増えていくだろうと思った。NPOのなかでも、慈善型NPOと事業型NPOに分けられ、どちらも社会問題の解決を目指すが、後者には対価があるという違いを聞いて驚いた。それは、後者が社会的企業として活動しているからであるが、社会問題をビジネスとして解決しその利益を社会に還元しているため、利益の追求が主目的でないということがわかる。しかし、その違いを理解するのが難しいため、世間の認知の拡大にはまだまだ時間を要すると感じた。NPOの事業志向の背景として、自由度が高く、革新性が高いとあったが、社会の変革にはNPOや協同組合が必要であると感じ、これらに賛同する人が増えることを願う。先日(12月4日)に労働者協同組合法が成立したが、3人以上の発起人がいれば設立できるため、届出の提出から政府の認可が下りるまでの時間分を短縮でき、その時間で助けられる人もいると考えられるため、この法成立が起点となって、協同組合の数が増えるだろうと感じた。
- ・今の当たり前は誰かの行動から始まっている。ということを踏まえ、国や自治体規模での 問題にするためには当事者の市民である私たちが自ら行動していくことが重要であると 感じた。また社会問題に対して根本的かつ継続的に取り組むためには、非営利ということ にこじつけて、ただ無償奉仕を続けることだけでは十分でなく、資本主義である現在の世 の中であるからこそ課題解決に繋がるようなビジネスをすることがとても重要であると 感じた。
- ・国と自治体の公助、それぞれの家での自助、企業の共助に、民間・非営利の第三セクターが絡んでいるという社会の構造について、改めて理解が深まった。また、NPOと協同組合が協力しているという実態を初めて知り、社会課題の解決と対価なしの事業の両立という活動は素晴らしいなと感じました。そして、これまでの協同組合と同様にコミュニティを育て、広げる活動は重要なのだなと感じました。
- ・協同組合とNPOを同じようなものだと考えていたが、協同組合はNPOとは違い、組織への出資と剰余金の配分が部分的に認められていて、規模がNPOに比べて圧倒的に大きいことが理解できた。そして、このことより協同組合はNPOに比べて事業が継続しやすく、協同組合の持つポテンシャルがとてつもなく大きいと感じました。また協同組合がアドボカシーの役割をもっているということから、協同組合がなかったら行政や国はさまざまな問題に気付かないままになっていた可能性が高いため、協同組合が国の中で果たす役割は大きいと考えました。そのため、国が協同組合への支援を手厚くすることは日本社会をよくするということに繋がると感じました。

- ・市民活動を通じて見つかった課題が国や自治体という大きな枠組みでの課題として様々な政策につながり社会全体の課題解決に向けた取り組みがなされると言うのは素晴らしいことだと感じた。膨大な数の組合員を擁する協同組合がNPOやその他市民との協働は大きな社会問題の解決への手掛かりになりうると感じた。
- ・第三セクターやNPOについて、ぼんやりとは理解していましたが、今回の講義を通じて、 協同組合とNPOの違いなどを理解することができて良かったです。NPOの障害者支援 や高齢者支援、子ども食堂、リサクル活動などは地域に寄り添った活動をしている協同組 合と重なる部分も多いと感じました。協同組合とNPOは近いものだと感じましたが、そ れぞれに違った良さがあり、どちらも社会に必要不可欠な存在だと思いました。
- ・政府、企業、家族が営利性などの問題で課題解決が困難な部分に対しては、市民活動団体がかかわり解決することで、その課題が解決することだけでなく、自分たちの課題は自分たちで解決するというような文化が生まれてよいのではないかと感じた。市民活動が社会的認知を受けることで国や自治体の政策につながっていくというところから、課題などを気付いた時には小さなことからでもその課題を解決するように取り組み、活動を広げていくことが必要であると感じた。活動が大きくなり、社会的に認知されるようにならば国や自治体を巻き込むことも可能になるので、課題に気づいたときにはまずその解決に取り組んでみるということが大切だと感じた。
- ・ただお金や場所、食べ物を渡すのではなくちゃんと働いてもらったことへの対価として渡すことの方が、その人の今後に本当に役立つのだなあと思いました。この点で「魚を与えるのではなく魚の釣り方を教えよ」という故事に似ていると感じました。ただ与えるよりも厳しく手間がかかるように感じますが本当にその人のことを想うならやり方から支援する方がいいのだなと思いました。
- ・社会には、国や自治体、家族、企業にも十分なサービスを受けられない人が存在しており、 その人たちの課題を解決するために、コミュニティづくりがされていることが分かった。 また、自分に課題があるわけではないが、社会に目を向けて「この課題を解決したい!」 と感じ、解決に向けて取り組んでいくことが大切であると思った。社会の中には、課題が 多くあり、その課題解決に向けてそれぞれ協同組合が活動を行っている。課題と課題を結 び付けて、協同組合同士が協力し合うことで、社会的に強いパワーを持つことができるの ではないかと思った。
- ・NPOと協同組合は、非営利組織として社会をより良くするという目的を持っている点で同じ部類に入るが、サービスの対象者が外にいるのか、中にいるのかという対象者の規模や出資の有無、余剰金の配分の有無などの点において異なっていた。しかし、まだ理解が不十分なところもあるので、もっとNPOと協同組合の独自性について理解したいと思った。また、フードバンクや子ども食堂などは、国が問題に気づく前に市民が取り組み始めた活動であると述べられていた。それは、「今の「当たり前」は、誰かの「ほっとけない」から始まっている。」という言葉からわかるように、社会の問題についてよく理解しているのはサービスの対象者である市民であり、市民が行動を起こすことで、政府がその問題に気づかせることができるとわかって、市民自身は自分の行動は小さなものであると感じていても、その行動に協同し、多くの人を動かし、やがて大きな力になることがあるということが分かった。私は、今回の講義を聞いて、市民の可能性を無限大に感じた。これを理解したうえで、どう行動するのかが重要になってくると感じたので、身近なところに問題はないか・何かできることはないか常にアンテナを張って、何か気づいたときに行動できるように大学の授業などを通して力をつけておきたいなと思った。

三重大学 人文学部法律経済学科

特殊講義「協同組合論」



<第12回(オンデマンド)>

「生協運動の現在と未来」

本田 英一/日本生活協同組合連合会 代表理事会長

第12回(12月21日):受講46名(市民開放授業一般受講者等を含む)

生協は組合員が、自らの暮らしをよりよくしていくために、出資・利用・ 運営参加する組織である。組合員の暮らしをよりよくするには、社会そのも のをよくすることが必要である。社会全体の暮らしがよくなるよう組合員自 身が行動することに協同組合の本質がある。協同とは、一人ではできないこ とも、仲間と心や力を合わせることで出来るようになることである。

【第12回/講義の要旨】

- ・協同組合は、共同で所有し民主的に管理する事業体を通じ、共同の経済的・社会的・文化 的ニーズと願いを満たすために自発的に手を結んだ人々の自治的な組織であり、生協は、 消費者・市民の願いや要望を実現するために事業活動を通じて消費者・市民が自発的・自 主的に助け合う組織である。人と人との結びつきによる非営利の協同組織である。
- ・協同組合運動の始まりであるイギリスのロッチデール公正先駆者組合は、労働者の暮らしをよくするために取引は市価、品質の純良さ、現金販売、一人一票、政治的・宗教的中立を原則とした。現在は、協同組合間協同やコミュニティへの関与など協同組合の価値を実践に移すための協同組合 7 原則がある。
- ・日本の生協運動は、大正から昭和にかけて労働運動や、農民運動、普通選挙運動など社会をよくするために尽力した賀川豊彦に始まる。しかし、戦争によって多くの組合が解散させられた。戦後、生協は平和を大切に、それぞれ時代の社会問題や、組合員の願いに事業と活動で対応してきた。近年では、少子高齢化や地域のつながりの希薄化を背景とし、買い物弱者、高齢者、孤立しがちな子育て家庭支援が課題である。また、災害や所得格差の拡大を背景に、被災者支援、生活困窮者支援も課題となっている。
- ・生協のビジョンには、「つながり」「つながる」という共通のワードがある。人と人とのつながりが希薄化してきている問題に、生協どうし組合員どうしが手を取り合い、それぞれの地域で取り組んでいくことが大事である。全国の生協で、くらしを支えるインフラとして地域社会への貢献や、買い物が不便な地域の組合員ニーズ、行政等との地域見守り協定や包括連携協定、子育て家庭や高齢者・障がい者への支援、社会的弱者と貧困の問題、生活困窮者への支援、奨学金制度、地域防災・減災、被災地支援、環境・エネルギー、平和、エシカル消費の推進など事業と活動で社会的な取り組みがすすめられている。
- ・2018年に、日本協同組合連携機構(JCA)が設立された。協同組合間協同がすすむよう力を寄せ合っていきたい。

第12回講義/受講生のレポート(抜粋)

- ・今回の講義は、今までの生協の講義の総集編のような部分があり、復習しながら生協に関しての知識をより深めることができたと感じている。他の講義でもあったが、やはり私が感じる生協の一番の強みは、営利企業や公的機関がなかなか手を加えることができない問題や課題に、解決できるだけの力と行動力がある点だと思います。だからこそ、今回の講義にもあったように、生協が子育て家庭を事業・活動の両面で支援してることや、社会的に弱い人々・貧困問題への取り組みを行なっていることは、本当に素晴らしいことだと思うし、もっと知りたい、もっと学びたいと感じる。
- ・生協の活動は組合員の暮らし、社会全体をよくすることを目標としていることから、生協 が事業や活動をすると、社会的な取り組みを行うことにつながることが多くなると感じま した。また、生協の総事業高は社会全体でみると決して多くはないが、事業や活動の果た す社会的な役割は総事業高では計り知れないものがあると思います。
- ・事業・活動を通した社会的取り組みが実施されており、ふだんのくらしを支えるインフラとして地域社会に貢献するものから、高齢者・障がい者・生活困窮者・子育て家庭への支援といった多岐にわたる事業・活動が展開されていることが分かりました。その事業・活動の中には奨学金制度改善など私たちに関係していることもあり、奨学金制度改善に向けて生協が行動していることは知りませんでした。今までの講義でも生協について学び、やはり生協というのは、私たちの生活に密接に関わっており、組合員のくらしへ貢献することを第一に考えている組織であると感じました。
- ・今回の授業を聞いて、ますます、生協・協同組合全体の事業が多岐にわたって行われているということが分かりました。山間部や過疎地域にも配慮してサービスを届けるという観点からも利益重視ではなく、消費者の満足重視であるということが再確認できました。また、「つながり方」というのも考えさせられました。ただ単に書面上でつながりを提示するというのではなく、どのようにお互いが考えれば、国民全体の生活がよくなっていくのか、ということを考えないといけない時代になったと考えます。
- ・今回の講義を通して、生協は「人とのつながり」をとても重視していると感じました。これは、今までの協同組合の講義でも共通して言えることで、協同組合の活動にどれだけ人との関わりを重視しているのかが目に見えて感じた。その中で、協同組合同士の関わりも大切になっていくと思うので、それぞれ根拠法が違うが、根本となる組合員や地域の人たちの暮らしを良くするという思いが同じなので、あとは、どう上手くすりあわせていくのかが重要だと感じた。また、生協の幅広い活動にとても驚かされました。生協がこれからの地域活性化を担っていく大きな存在となっていくように感じました。きっとこれ以外にも様々な活動を行っていると思うし、ウィズコロナの時代になってまた新たな活動が始まると思うので、そこにも注目していきたい。
- ・実際に行っている様々な事業を具体的に紹介していただいたことで、とても幅広い活動をしているということを知り、とても興味深かったです。特にコロナウイルスの流行によって生協の良さである人とのつながりを生かすことが難しいと思いますが、実際に会うということ以外の方法でもネットワークを作ることも可能であると思うので、生協はさらに活動領域を拡大していくように感じました。また、生協に支援してもらっている地域の人々がもつ悩みやニーズは様々で普段の生活の食事や買い物などの支援や、子どもや高齢者、貧困者への支援、さらには地域の枠組みを超えた環境問題や災害時の問題などと幅広い活動が必要であることが感じられました。日本の協同組合には共通の法律がないことから、生協だけでなく協同組合全体が共に協力しながら社会を支援することで、それらの事業や活動の力が最大限発揮されるのではないかと感じました。

- ・今回の講義で、時代に寄り添いながら成長し、発展を遂げていく、生協の可能性を感じることが出来ました。福祉や医療だけでなく、環境、エネルギーや平和の活動など幅広い分野で活動を行っており、社会への貢献度がすごいと思いました。利益を追求する株式会社の存在が全く必要ないとは思わないが、それだけではやっていけない時代になってきていると思います。そこで、生協という組合員の理想に近づいた運営をするような存在がいることは大切なことだと思います。コロナ化を経てこれから、生協がどのように変化していくかに注目していきたいと思います。
- ・企業は自分の強みの部分に集中的に資源を導入することが利益(企業の目的)につながる が、生協はさまざまな事業領域に進出することで総合力を発揮し、事業高が増加している ことがすごいと思った。生協がさまざまな事業領域に進出するということは進出先の私企 業とは競争関係になることを意味する。私企業は利益につながる消費者の獲得のために、 低価格商品を売って多くの消費者の興味を向けさせる。それによって生協を利用する人は 減少すると考えられるが、事業高が増加しているということは、生協はそれだけの利用者 や生協に対する信頼(安全性、品質など)が確立されていることが大きな要因であると感 じた。事業・活動を通じた社会的取り組み(16項目)のうち、「買い物が不便な地域の ニーズに応えて」とあったが、この地域・高齢者こそ、私企業が取り込めない消費者であ ると感じた。私企業に対して生協は山間部や離島も含んだ広い地域に食材を配達しており、 私企業のネットショッピングにはない、組合員(消費者)とのリアルでのつながりが生協 の大きな強みであると私は思った。宅配事業のインフラを活用した「地域見守り活動」で 市町村と協定を結んでいる生協があるという話があったが、行政と連携することで、健康 で文化的な最低限度の生活を維持できるまでには到達できると考えられるため、経済的貧 困者の底上げが期待できると感じた。「フードバンク活動等への取り組み」という項目が あったが、子ども食堂において、難しい問題があると感じた。家庭内で十分な食事ができ ていない子どもは、食事面だけではなく、外出機会や情報収集能力が一般的な経済力の家 庭に比べて不足していると考えられる。現在はSNSで情報発信をすることが多いが、貧 困家庭では家にパソコンやスマートフォンがない場合が多い。そのため、どれだけデータ 上で情報発信しても、その家庭の子どもは情報を得ることができない。この問題を解決す るために私は学校で子ども食堂の情報を発信する機会を設けることを提案する。前述した ように、市町村と提携した生協もあるため、その地域の公立学校は生協の状況を発信して も大きな問題にはならない。また、生協は中立であるため、みんな(特に組合員)が幸せ になることができる権利を持っている。よって、学校で子ども食堂の情報発信をすれば子 どもは情報を得て子ども食堂に行き、あたたかいご飯を食べることができる。このような 経験から、子ども食堂や生協に関心を持ち、成長すれば生協に恩返しがしたいと考える子 どもも現れるはずであり、これが新たな組合員や生協活動の継続・継承につながると考え られる。
- ・それぞれの時代の組合員の願いに、事業と活動で対応というところで、生協がカラーテレビ値下げ運動や不当な値上げ・もの隠しを行う企業を告発したことなど、生協の活動としてイメージしていなかったようなことにも取り組んでいて驚いた。総合力の発揮というところで、会社などは営利を目的としているので事業をあまり広げすぎるとリスクになるが、生協などは組合員の暮らしを良くしていくということで事業拡大が問題にならないというのはメリットであると感じた。大規模災害時などに生協が支援物資を届けることを行っていたということは知らなかった。車の入れない山腹や離島にまで届けているということに驚き、営利を目的とするような企業にはできないことであると感じた。

三重大学 人文学部法律経済学科

特殊講義「協同組合論」

<第13回(zoom)>



シンポジウム「安心してくらせる地域づくりと生協」

日笠 博幸/生活協同組合コープみえ 地域政策担当次長大田 卓 /みえ医療福祉生活協同組合 検診センター主任

第13回(1月18日):受講59名(市民開放授業ー般受講者等を含む)

- ・三重県の西部に位置する伊賀地域は、関西地方の文化的影響を強く受けている。伊賀市は城下町の面影が残り、名張市は大阪などのベットタウンとして発展してきた経緯がある。2025年には高齢化率が35%を超え孤独死や、引きこもりなどが懸念される。
- ・組合員が生協の活動に参加する形はいくつかある。その一つに組合員活動への参加がある。組合員が自らの問題意識に基づいて仲間をつくり自主的に活動することである。活動への参加は、組合員の自主的が前提である。社会的課題への取り組みは、生協だけなく地域や他団体と共にすすめることが大事である。
- ・2012年に地域で活動する組合員組織「エリア会」を立ち上げた。エリア会は、自主的・自発的に参加した組合員と役職員で構成され、地域の福祉政策や、消費者問題・消費者行政への取り組みや考え方を具体化している。この間、地域の居場所づくりを目的にとしてコープカフェ「茶楽」や、消費被害者防止の啓発活動「ペープサート」等を実施している。活動を通して、地域の見守り活動や行政との災害支援協定、地域ネットワークへの参加等のつながりがひろがった。高齢化がすすむ伊賀地域では、高齢者が安心してくらせるよう一人ひとりの状況に応じた取り組みが求められている。
- ・医療、介護と地域が一体になって暮らしを支える。それは、他の病院や介護事業所では できない取り組みである。組合員や地域住民が参加することで、地域まるごとの健康づ くりをすすめている。
- ・地域社会には問題が山積している。近所付き合いや、独居不安、認知症、介護疲れ、交通手段、子どもの発達、教育、貧困等がある。人は一人では生きられない。優しさや思いやりが循環するような場の中で助け合い、支え合うことによって、社会や共同体をつくってきた。しかし、コロナ禍で一人ひとりが分断されやすくなっている。
- ・有償ボランティア「いきいきくらしの会」は、信頼感を大切に暮らしの困りごとを組合 員どうしで支え合う活動である。定期的な情報発信と組合員への訪問を通してニーズを つかむようにしている。また、送迎ボランティアの活動は、公共交通機関や自力で病院 や診療所への通院が不自由な組合員を、組合員が乗り合い送迎する活動である。それぞ れの組合員が喜びあえる活動である。誰かのためにと思って始めた活動が、自分の生き がいや居場所になっていく。一人ひとりの心や身体の健康や暮らしを考えることは、次 の活動や社会のことを考えることになる。
- ・コロナ禍だからこそ組合員や地域の方々と手を取り合いながら「たすけあい」を大切に した活動がすすむよう、その役割を発揮していきたい。

第13回講義/受講生のレポート(抜粋)

- ・私は、今回の講義を聞いて既存の生協の活動だけではなくて、社会的なテーマの中で自分のやってみたいことを組合員として提案して実際に活動することが生協につながるということを聞いて、これなら多くの人が生協の活動を身近なものに感じられ、組合員としての自覚を持ちやすくなると感じました。なぜなら、自分で活動内容を考えることで、モチベーションの向上につながったり、満足感が生まれたりすると思ったからです。また、地域活動に自分が関わると考えたときに、地域の人々との関わりの有無や頻度で地域活動への参加のしやすさが違うと考えました。なので、地域活動にみんなが参加しやすくするために、日常的に地域で清掃活動などをして、地域のつながりを強めることが大切だと考えました。そのために、私は地域のボランティア活動などに積極的に参加するように行動しようと思いました。
- ・「誰かがやってくれているからいいや」ではなく自分もやる側に関わることができるということをちゃんと考えなくてはならないと思いました。私は一歩踏み出すのに心配してしまって躊躇ってしまうことが多いのですが、しっかり考えようと思いました。
- ・最近になって、やっと地域活動にみずからが参加し、協力しあうことの大事さを理解した。 そのため、今日の講義では、実際に自分がこの活動に参加したら、どのようなことができ るのか、またどのようなことが学べるかの観点で、見ることができたと思う。特に、伊賀 エリア会の消費者被害者防止の啓蒙活動の人形劇は、私の興味を大きく引きました。高齢 化と情報技術の複雑化に伴い、これから消費者被害者防止の啓蒙活動の意義はますます大 きくなっていくと思います。その中で、この活動は人形劇という理解しやすい活動で、人々 に働きかけている点で、非常に効果的だと感じました。自分が実際にやろうとすると、若 干不安な部分があるものの、やったら必ず楽しいだろうし、充足感を感じることが予想さ れるとため、活動を行う側も、受ける側も、どちらにとっても利益しかない点で、非常に 魅力的です。自分がこのような取り組みができるものはないかと探して見たくなりました。
- ・地域活動に関わるために生協からの参加の要請や、活動内容を知ってからの参加であるのが一般的であるという風に考えていました。しかし、今回お話を伺い、組合員が自ら自発的にこういうことをしたいという声から実際の活動につながるというケースがあるということを知り、私は地域に関わることに対してとても受け身であるということを感じました。組合員であることを自覚する機会がないという考え方ではなく、組合員であるという自覚を持ち積極的に活動に参加することや、自ら情報を得て活動に参加・取り組んでいくことが大切なのだと感じました。
- ・組合員の活動や生の声を聞いて、コロナウイルスの状況下新たな様式が作られた中、普通の日常がどれだけ価値があったのかということがシンポジウムやプレゼンの内容を聞いて分かりました。高齢者の方たちが配達やサロンを楽しみにしている。そのような状況を見て、協同組合の活動が人の心に寄り添っていたのだなと考えさせられる授業でした。これからは自分が高齢者の方たちの心に寄り添っていきたいと考えさせられたので、ボランティアなど地域の人の役に立つことができればと思いました。
- ・今回のシンポジウムの内容を踏まえて、特に印象に残ったのは、将来的に組合の活動を担っていく、若い世代の後継者が不足しているということだった。実際に、今回のように組合で働く人たちのお話を聞くと、どのような活動内容なのか実際に体験してみたいと思うが、講義を受けていない人は、組合の活動内容を知らない、そもそも組合の存在自体を知らない人も多くいると思う。より多くの若い世代が、組合の活動に理解を示し、活動してみたいと思うには、もっと組合と学生(若い世代)との交流の場を増やすべきであると思った。

- ・生協は、ただ単に地域をより良くする取り組みをたくさん行うというわけではなく、組合 員や地域の人々に寄り添い、多団体とも協力の元、その地域にあった、そして地域のひと りひとりにあった、温かい取り組みが大切だと理解した。この一人ひとりに対して対応し ようとする姿勢や、組合員同士の助け合いは、このコロナ禍で孤独を感じている人々にと っては、とてもありがたいものであると思うし、人々の不安も緩和されると思った。特に、 地域の人たちが集まってお話しできる居場所つくりや、送迎ボランティアは、日常の中で、 孤独感を取り払い、人との関わりを感じられる場としてとても有効だと感じた。しかし、 やはりコロナ禍だとこのような直接的な関わり合いは難しいので、感染リスクの低い方法 についても考えていかなければいけないと感じた。例えば、ネット環境がいいところでは、 オンラインでお話しできる機会を作ったり、ネット環境が十分でなければ、お手紙やメー ル、電話等で定期的かつ積極的に会話を行ったりするなど、人とつながっている安心を自 宅でも感じてもらうことができるようにしても良いのではないかと感じた。このように、 今回のシンポジウムを通して、今どのようにして自分が地域活動に関わるということを考 えてみたが、私自身、大学生協にしか所属していないため、自分の住んでいる地域活動に 関わるのは少し難しい上に、地域に関する知識や情報が少ないのが現状である。しかし、 私の住んでいる地域のボランティア活動等に参加することは可能だと思うので、そのボラ ンティア活動を通して地域とつながり、また、大学生協についても組合員としてできるこ とは何かを考えたり、実際に行動してみて、そこからまた次の段階への地域活動へとつな げていきたいと思う。
- ・協同組合による地域での活動が高齢化しているというお話を受け、自分たちのような若い 世代ももっと積極的に参加していくべきだと感じた。協同組合について、サービスを提供 してくれるものだという捉え方から、自分たちの相互助け合いのための組織であるという 認識に改めて捉え直し、協同組合の一員として様々な活動に協力していきたいと感じた。 そのためにも、どのような活動をしているかといったことから勉強していきたい。
- ・コープみえ伊賀地域組合員の活動の話を聞いて、伊賀がとても素敵な町であると言うことがわかりました。私の地元でもコープ宅配が行われており、そこでコミュニティができあがり、世間話や子育ての話等が出来ていてとても良い環境だなと思いました。また、伊賀での紹介でお年寄りの方の家までの宅配サービスもしており、免許返納や足腰が不自由な方にとって便利だなと思いました。また、伊賀地域の生協の生協だけで完結しない地域の連携を作っていくという意識が大切であるなと思いました。生協を軸に買い物等の日常生活が困難である高齢者の方のサポートや子育てで不安や悩みを抱えているお母さん方の気持ちが少しでも楽になることは大切なことです。近年、近所づきあいの観念は薄れつつあります。このことを解決し、再びコミュニティを形成することによって、より良い町作りに繋がるのではないかと思います。
- ・生協の組合員組織への参加方法として三つの紹介されており、それはすべて生協の中だけで完結するものではなく、地域の方や様々な方とのかかわりや協力関係が重要になってくるとおっしゃっており、今日だけではなくこれまでの講義を聞いてこのことはかなり実感していました。また、コロナウイルスの拡大をはじめ、私たちの生活は日々変化しているため、それに対応した組合活動が必要であると感じました。そのためには、若い世代の意見や活動が必要だと思うので、そこで自分も関わりたいと感じました。特に私たちの世代は周りの人とのかかわりがSNS中心になっていて、希薄になりがちだと思うので、逆にSNSの良さを活用した組織活動をおこない、若い世代への浸透不足を克服するのがよいのではないかと感じました。

三重大学 人文学部法律経済学科

特殊講義「協同組合論」



<第14回(zoom)> 「協同組合間協同について」

前田 健喜/日本協同組合連携機構 協同組合連携部長

第14回(1月25日):受講46名(市民開放授業一般受講者等を含む)

協同組合を一言でいうと人に基盤を置く組織。組合員が創る。参加する。1 人一票を持つ。人に基盤を置くがゆえに、組合員の特定の二一ズから始まり暮らし全般、地域社会全体、さらに次世代へと全面化していく特徴がある。協同組合間協同は、事業と事業の協同からさらに各協同組合の事業の共通基盤たる地域づくりにおける協同へ、組織間の連携から組合員や住民を中心においた協同へと向かう方向がある。私たちの営みが瞬間瞬間に次の社会を創っている。私たちが参加と協同で社会を変えていく可能性も持っている。

【第14回/講義の要旨】

- ・「産直」は、生協と農漁協との農水産物の取引という協同組合間協同の一つの形。196 0年代に適正な価格で安全な食べ物を求める消費者運動の中から生まれた。環境にやさし く新鮮で、安全で、おいしい食べ物を買いたい消費者のニーズ、安全な農産物を供給した いという生産者のニーズ、お互いが交流したいという願いに立脚している。
- ・1世帯当たり所得は1994年以降減少傾向にある。特に、母子世帯で低く全世帯平均の 半分以下である。生活が苦しいと感じる人の割合は1992年から増加傾向にある。その 割合は2013年で60%にのぼる。母子世帯では85%である。
- ・高齢化に伴うさまざまな問題がある。男性高齢者の孤立の問題も指摘されている。単身世帯は着実に増加している。近所付き合いの程度は継続して縮小している。つながりの希薄化が進行し、協同(助け合い)の力は弱まっている。
- ・1990年代以降、貧困化、格差拡大、少子高齢化、地方における過疎化、生活インフラの維持の困難といった問題が起こってきた。これらの問題は、「持続可能な地域社会づくり」という課題を提起した。まさにSDGsの課題そのものである。この課題を解決するために、協同組合間の協同、さらにそれを越えた幅広い協同が求められている。
- ・住民主体の持続可能な地域づくりが生まれている。持続可能な地域づくりにおいて、組合 員・住民主体の動きを協同組合が連携して応援していく形が生まれてきている。
- ・今後の協同組合間協同は、事業間の協同からさらに事業の基盤たる地域づくりにおける協同へ、組織間の協同から組合員や住民の主体的動きを中心にそれを支援する協同へ、さらに、協同組合間の協同からそれを越えた協同へ、という方向がある。
- ・誰もが生存について心配することなく、尊重され、力を発揮し、認められ、幸せに生きられる社会を創っていくために、協同組合の仕組みを活かすことができる。

第14回講義/受講生のレポート(抜粋)

- ・自分の中のこれまでのイメージとしては、人々が生まれ、生活していく中で国や都道府県、 あるいは市町村などの公的な機関の援助や企業などの私的な機関のサービスなどによっ て暮らしを支えられているという考えを持っていた。この協同組合論の講義を学んでいく 中で、国民一人ひとりが協力し自らの力で助け合いながらそれぞれの地域で暮らしていく ことの重要性に気がついた。
- ・地域における協同組合間連携の取り組みは、地域に寄り添った活動を行なっている協同組合でしかできないことだと思いました。内容も、それぞれの地域特有の問題や課題について、それぞれのやり方で解決しており、とても良い活動だと感じました。現在コロナ渦で子どもからお年寄りまで地域との接点が少なくなり、孤立しやすくなっているので協同組合の活動の重要性を感じることができました。そして、協同組合は時代の変化に対応し、地域や住民を支えることができる唯一の存在だと思いました。
- ・今回の講義で、協同組合は組合員主体の行動がこれからの時代大切になってくるということを聞いて、協同組合は組合員や地域の人達の暮らしを豊かにすることを目的の1つとしていることから、組合員が課題と提起して、その課題を協同組合に任せるのではなく、組合員自身が活動に参加したり、活動を始めたりすることによって、従来よりも、より課題ややるべきことが具体的になり、より細かい部分まで対策することができるようになると感じました。このことより、組合員が個々でも活動しやすいような仕組みを作ることなどが大切になってくるのではないかと考えました。
- ・協同組合間協同の事例では、相互に協力し合うことで、一丸となって地域振興へと取り組むことができ、より暮らしやすい地域社会を作り続けることができると感じた。また、農林水産業における地域振興だけではなく、組合が協同して地域住民の困りごとについて対処する取り組みや、高齢者や子供の交流の場を設けるといったような活動をするなど、幅広く協同して行われていることが分かった。このように住民主体の地域づくりが生まれているが、将来的にも、住民ひとりひとりが助け合いの精神を持ち、社会をよりよくしたいと強く思うことが大切であると思った。
- ・協同組合の組合員さんたちの応援する姿が結果としてつながるというのがこれからの協 同組合となり、事業を繋げる地盤作りを今はしているということを聞いて、組合員になる というひとつの選択を意識した。
- ・協同組合の課題としてあげられる協同の力の弱まりはこのコロナ禍によって人とのつながりをなかなか持てない現状から、持続可能な地域づくりのために向き合うべき問題であると感じられることが多々感じられ、今回みんなで生き延びていくことと言葉を添えられており、とても重要な案件であると感じられた。
- ・協同組合間や地域間の協力が必要だということは、今までの講義の中で理解していたが、 どのような流れで協同組合間協同が必要だと考えられるようになったのか、また協同組合 間協同の具体的な事業が今回の講義でよくわかった。今回の講義で説明された協同組合間 協同の具体的な事業では、本当に多種多様な協同組合が協力して地域の問題解決に取り組 んでいて、他の協同組合の存在があったからこそできたことも多かったように感じた。特 に私の中で印象的だったのは、JA愛知東女性部「やなマルシェ」で、初めは5人という 小さな規模での行動が、いろんな人の共感を集めて多くの協同組合や地域の人を巻き込ん でいったという部分に感動した。また、今回の講義の中で、「地域つながりセンター」と いう存在を初めて知った。この団体は、地域の団体との連携を図り、そこから生まれた主 体的な取り組みを支援することを目的として作られた。このようなプラットフォームとな る団体があるのとないのでは、協同組合間協同のやりやすさが全然違ってくると思った。

- ・協同組合間協同の事例の一つ、兵庫県の売れなくなったスーパーが閉店する姿を目の当たりにしたときの市民の気持ちの説明がなるほどと感じた。自分達が商品を買わないと、移動店舗も同じように潰れてしまう可能性があると市民は思い、自分達が移動店舗を「支えよう」という意識を持つようになった。身近に起こると何とかしなければという焦りから、地域の活動が生まれるという良い事例だと思った。倒産してからではなくても、自分達の地域を守るという意識を芽生えさせなければならないと思う。
- ・1世帯当たりの所得減少や高齢化、社会的孤立など、様々な問題がある中でも日本社会は「個」へと向かう流れが進んできている。東京都沼島市の自治会加入の状況を見ても9年で7.6%減っており、繁栄指数のチャートでは他と比べて社会的資本の順位が低くなっている。所得が減ったり高齢になったりしているような状況だからこそ、本来は協同で助け合うようなことが必要であるのではないかと感じた。高齢化や過疎化など地域社会自体の存続が問われているような状況なので、協同組合の活動としては地域の場を作ることでつながりを回復することや助け合いなどを推進することが重要になっていくと思った。協同組合間活動といっても、漁協や農協など他の協同組合と連携することは難しいと思っていたのでたくさんの事例が紹介されていたことに驚いた。持続可能な地域づくりを行っていくためには、協同組合が主体として動いていくのではなく、組合員や住民が主体として動くことをサポートするような形の協同を行っていくことが有効であると感じた。協同組合の取り組みとしても、事業自体ただ行っていくのではなく、その活動をする地域社会の存続に向けて取り組んでいくことも今後は必要になっていくと感じた。
- ・1960年代に、産直という協同組合間協同の方法の一つがとられたが、これは現在でも消費者のニーズに即したものであると感じた。安全な食べ物を適正価格で提供することが大きく影響しているが、特に、産直三原則が重要であると私は考えた。1つめの「生産地と生産者が明確であること」は、昨日のゼミ活動で訪れた茶農家さんが言っていたことと同じであった。ネームバリューの高い大企業の名前を記せば売れるという時代は終わり、誰がどこで作っているかがわかることが現在は重視される。食品偽装などによって商品の本質が問われ、現在では多少高くても、明確なものを消費者は購入する傾向にある。3つめの「組合員と生産者が交流できる」ことも、意見交流ができる良い機会である。この原則は必要なものであると感じた。住民主体の持続可能な地域づくりが現在は生まれてきているという話があったが、協同組合はその活動の中心(協同組合間協同)ではなく、あくまで支援(手助けする)側に転身することが、これからの地域社会に求められる協同組合の在りかたであると感じた。コミュニティの中心にプラットフォームがあり、そのプラットフォームから住民や協同組合などのあらゆる方向へと矢印(意見や交流の場)が伸びている状態が理想であると私は思う。
- ・今日の講義でJCAがどのような活動をしており、社会でどのような役割を果たしているかということを初めて知りましたが、さまざまな協同組合がある中でそれらが本来の活躍をするためにはJCAという存在が必要不可欠だと感じました。その理由は、今日の話の中にもあったように、近年、特にひとり親世帯での貧困の深刻化や人口減少、高齢化といった日本全体が抱える課題が多くなっており、このような課題を解決するためには、協同組合といった小さな枠組みだけでなく多くの組合の力が必要であり、その連携が重要になると思ったからです。また、JCAの使命ともしている持続可能な地域・仕事づくりのためにも協同組合間協同は必要であり、新型コロナウイルスの影響でつながりが希薄になりがちですが、今後も協同組合やその他の関連する組織との協力活動を通して課題解決をしていくべきだと改めて感じました。

三重大学 人文学部法律経済学科

特殊講義「協同組合論」



<第15回(ZOOM)> 「協同組合の未来」

青木 雅生/三重大学人文学部 教授

第15回(2月1日):受講33名(市民開放授業一般受講者等を含む)

自立した個人・組織としての主体性をもち、協同していく共同性(協同性)を発揮していくことが、これからの時代において、改めて求められている。新自由主義的な経済政策も相まって、ますます経済的弱者は増え、追い詰められる度合いを増している。こうした資本主義的な経済ルールに巻き込まれつつ補完し続けるだけに終わる協同組合なのか、協同組合の精神を発揮した社会のありように資本主義的企業も合わせざるを得なくするのか、社会共生の実現を念頭に置いた場合に掲げるビジョンはそういうものではないだろうか。

【第15回/講義の要旨】

- ・資本主義経済の中にあって、企業でも行政でもなく、市民の自発性・自立性と相互扶助に基づく協同組合は、我々の生活に豊かさや安全安心など様々なものを提供してきた。一方で、様々な課題・問題を内包しながら発展してきたともいえる。現代そして未来における協同組合の存在意義や役割を考えたい。
- ・協同組合原則の第7原則にて、協同組合の外側ともいえる地域社会に積極的に関与してこ そ、初めて協同組合はその力を持つことが確認されたともいえる。
- ・協同組合は人がつながっている組織であるから、顔の見えにくい市場のありようを是正し 品質を高めることにつながる。また、社会にある様々な制度には隙間がある。そこを協同 組合が持つネットワークや仕組みを生かし、埋めることによって、社会全体の対応力を高 めることにつながりうる。困難を抱えている人に寄り添って、その人たちと一緒に考える 姿勢、つまり当事者を大事にするという考え方が協同の持つ力あるいは可能性である。
- ・人口減少社会における協同あるいは協同組合の課題として、都市への人口集中と地方における過疎化の進行、高齢化と少子化が進行する中、人口減少社会で、暮らし続けられる生活 圏を維持や、当事者を包摂できる社会環境をつくることが求められる。
- ・協同組合の次なる展望として、協同組合間協同による組合員・住民主体の動きを応援していくことが重要である。自立した個人・組織としての主体性をもち、協同していく共同性(協同性)を発揮していくことが、これからの時代において、改めて求められている。
- ・協同組合は存在感を高める必要がある。従来の延長線上だけではない発想の転換と具体的な仕組みづくりが求められているのではないか。協同組合の理念や精神、社会にある諸課題について、職員や組合員そして一般の人々に学習する機会を提供し共に学びあうことが、協同組合の活動をさらに発展させる源泉となる。

第15回講義/受講生のレポート(抜粋)

- ・最初は協同組合について全く理解できていなかったが、計15回の講義を通して、今では協同組合のこれからの課題について考えるまで理解が深まったように感じる。講義の中では、さまざまな立場から協同組合についての取り組みと協同組合そのものについての考えを多様な角度から知ることができた。政府や民間の力が及ばない分野へのある種のセーフティネットとしての協同組合は、これからどれだけ社会が発展しても、その意義は決してなくなることはなく、むしろ現在の状況を考慮すると、発展すればするほどその意義は高まっているとさえ言える。だからこそ、協同組合が多くの人に知られてない現在の状況は、非常にもったいないと思う。私たち大学生が今、協同組合の役割を多くの人に知ってもらうためにできることは何か、そして協同組合の取り組みをより大きな規模で行うためにできることは何か、これらのことを考えることは非常に重要な課題であると、今日までの講義を通して、私は強く確信しました。
- ・協同組合論の授業を通じて協同組合というものが何なのか、また協同組合が持つ力や今後の課題について考えることができました。この講義をとるまでは自分自身が大学生協に加入をしていながら生協が何なのかについて知らず、また協同組合についても全く知らないような状況でした。講義を通じて身の回りにもたくさんの協同組合があり、自分自身が知らなかっただけで意識をすることで周りにもあるということに気づきました。自分のように協同組合について知らない人は多くいると思いますし、また意識をして周りを見て気づく人も多いと思います。しかし、知らなかった私も問題であると思いますが、意識していない人にも知ってもらえるような取り組みがなされていなかった協同組合自体にも問題点があると思いました。私たちは日常生活の中で実際に利用したことがなくても知っている企業は数多くあるとおもいます。今思い返してみればそれらの企業は広告や何らかのチラシなどの私たちの日常生活に、知ってもらえるように入り込んでいたように思います。協同組合の基本趣旨として広告などに費用を割くのなら加入者、組合員に還元しようというのがあるのかもしれません。しかし、多くの人に知ってもらうことこそ協同組合の発展においては重要なのではないかと考えるに至りました。
- ・企業や行政では手が届かない、福祉や教育、貧困などの問題に対して、サードセクターとして対処していくという協同組合の役割を改めて確認することができた。また、ICAの声明の定義から、事業を通じて人々の共通目的を達成する組織であるということも確認できた。原則の中では第5原則教育、研修及び広報や、第6原則協同組合間の協同、第7原則地域(コミュニティ)への関与など、これから協同組合が果たすべき役割についての指針を再確認できた。協同組合の持つ力あるいは可能性では、制度の隙間を埋めるサードセクターとしての役割や、高齢者や地域とのかかわりに関連して個人の尊厳を尊重するということも確認した。人口減少社会における協同の課題では、高齢化によって地方で過疎化などが進むだけでなく、都市でもコミュニティの希薄化が進んでいることなど協同組合として果たすべき役割があるということを見ることができた。協同組合があまりにも知られていない現状や、ICAの第5原則「教育、研修及び広報」から、協同組合の組合員である内部やその他一般の人々などに対して教育を行っていくことが必要であると感じた。
- ・この講義を受講するまでは、協同組合について深く考えることもなく過ごしてきました。 しかし、数々の講師の方々に協同組合についてお話を頂き、日々協同組合に対する関心や 興味が湧き、理解も深まりました。根本原理は同じであるが、話す人や職業などによって 少しずつ内容が変化し、大変興味深かったです。ZOOMやオンデマンドなどを駆使して 行われた授業であったが、私はどの講義内容も有意義なものであると感じたため、この協 同組合論を受講して、自分のためになったと感じます。

- ・地方では過疎化が進み、高齢者が取り残されているという現状がある。一方で、都市部は なんでも揃うというように多くのサービスや商品を入手できるが、これは人と人とのつな がりを弱め、全てを一人で解決させようとする自己責任の考えの象徴であるように感じる。 したがって、「便利さ=人としての生きやすさ」ではなく、便利でない方が、かえって人 と人とのつながりが強まるのではないかと考えた。高齢者が一人で買い物や病院へ行くと きに、移動手段が少ないが、そこで協同組合が送迎サービスを行うことで、移動時間に会 話が生まれ、つながりが生まれる。これは、高齢者の問題を高齢者自身に解決させるので はなく、周りの人に協力してもらって解決へ導く良い方法であると感じる。周りを巻き込 むことで迷惑をかけてしまうという後ろめたい感情を持っている人もいると考えられる が、自分自身で解決できる問題は少ないように私は思う。相談できる場がないことで孤独 死などの問題が生まれるのであり、相談や周りを頼ることで解決できる問題の範囲は大き く広がると感じる。だからこそ、協同組合は問題解決のためのお手伝いをすべきであると 私は考えるのであり問題を主張する中心人物であってはならないと考える。あくまで、問 題を発見し解決策を考えるのは個人の仕事である。この考えが実行されれば、社会的問題 に気付いても何もしないという人は減るし、自然と協同組合に参加する・関わる人は増え る。その結果として、「市民活動」が活発になり、より多くの問題解決が可能になると私 は思う。また、個人が問題を発見するにあたり、自身が置かれた状況をしっかりと把握す ることが必要である。そのために学習が必要であり、学生でなくても学習という習慣を失 ってはいけないと考える。
- ・協同組合論の講義を受けるまで、協同組合がどのような組織であるのかを知らなかったように、知名度が低いことが問題となっていることや、組合の活動において、組合員の年齢層に偏りがある組合があることなど多くの課題が残されているのだと再認識した。現代の人々が、地域社会で生まれる課題について目をそらさずに、相互自助を前提とし、相互扶助を行い、助け合いの輪をどんどん広めていくことが大切であると思った。協同組合の活動を、協同組合「が」行っていると認識するのではなく、自分たちも協同組合の一員であることを自覚し、協同組合「と」事業を行うという姿勢を持つことが重要であると感じた。
- ・協同組合で働く方のお話や今回の講義を聞いて、協同組合についての理解、自分自身の考えが深まったと感じた。協同組合は、行政や企業の出来ない範囲、つまり市民の一番近くに潜む課題に取り組んでいるが、市民自身が課題に気づき、その課題の当事者はもちろん、当事者の周りの人たちをも巻き込んで課題解決に取り組むという仕組みが出来上がればもっと良いのではないかと思った。また、私たちの働きとしても、労働者協同組合法が成立したことで、企業等で働くこと・自分で起業すること、に加えて新しい三つ目の働き方の選択肢として協同組合がメジャーになってくると思う。そして、課題を見つけた時、見て見ぬふりせず、自分の出来ることをする広い範囲での当事者になれるように、協同組合論で学んできたことをこれからも深めていきたいと思う。
- ・これからの協同組合の課題は地域との繋がりをいかに強くすることだということがわかった。地域との繋がりを強くすることによって近所づきあいというものが減っている現代で地域のコミュニティを形成することができる。これにより、地域の間で助け合いの精神が生まれる。実際の活動では「たまり場」を作り、みんなの相談できる場や高齢者の方の健康作りや癒しの場がある。このように地域の繋がりを強くすることはいろんな人を助けることにつながっていく。また、これからの課題として協同組合の活動をもっといろんな人に知ってもらうということが大切になってくると思う。素敵な活動がたくさんあるので広報活動に力を入れ、さらにいろんな人の生活を豊かなものにしていって欲しい。